

道具の正しい「住み方」

松 岡 智 之

人間の本質について

「猿が笑っているとこ見たことある？」

久しぶりに訪れた動物園で僕は聞いた。

「猿って笑うの？」

不思議な表情で君は答えた。

「うれしければ笑うよ、たぶん。」

自らの欲求を素直に満たしたことに対する喜びの微笑みのことである。

本物の表情である。

幼い子供たちがつくる表情にも同じことが言える。

彼等には、自分の中に生じた欲求を素直に受け止め、満たそうとする力があるのだ。

人間は、本来この力を備えて生まれてくる。しかし、成長の過程において、その力を抑えようとする別の力が養われてくることも事実である。特に「社会」といわれる、人間と人間との関係によって成り立つ領域では、葛藤や遠慮などという様々な外力により、欲求を満たそうとする力は衰えてきてしまう。また、逆を言えば、その力を最大限に発揮しながら「社会」に適応することのできる人間はとても優れていると言えるのかもしれない。

ある時期、人間の本質とは何か？ということが非常に気になり、知り合いのH氏に訊ねたことがあった。彼の答えは、こうだ。

「欲求を満たすことじゃないの。」

この様なことがあり、「欲求」ということについて触れてみた。もう少し深く「欲求」について触れてみると、欲求を満たすということは感覚機能（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感及び第六感）を通じて得られる心地よさであると言える。これを「官能」という。

人間の本質を追求することは、官能的な生活を追い求めることと同義であると言える。そしてこれは、古今東西を問わず人間として重要なことであると思う。

「住み継ぐ」というテーマは、この先どこまで人間を官能的な生活へ導いてくれるのだろうか。その可能性を「道具」という人間の生活からは切り離せないモノ、つまり最も人間に身近なモノを切り口に探っていきたいと考えている。

「道具」の概念

「道具」とは、何か？どの様に定義されるものなのか。私が考える道具とは単なるモノではない。モノはモノであり、そのモノが人間に使われ、触れられた時、モノは道具になると考える。つまり、モノが人間と関係を結ぶ時、そこにあるモノは道具となるのだ。椅子やテレビ、照明器具や鉛筆などすべてその対象になるといえる。さらに、言えば部屋に飾られる絵画なども眺められることにより「道具」となるのかもしれない。

道具とは「モノ」と「人間」との間に生まれると言った。正確に言えば人間が何らかの形で「モノ」と接触した時に生まれる。人間がおこなう「コト」が「モノ」と出会う時であり、つまり、「道具」とは「モノ」と「コト」の2つから成り立っているのだ。

では「モノ」とは何で「コト」とは何なのか。「モノ」には形や色、素材やその構造などが含まれると考えられる。また「コト」は使い勝手の良さやその肌触りなどが挙げられる。つまり、「モノ」とは形や色を表現する「造形」とその素材や構造などを「技術」の二つから、そして「コト」とは「機能性」と人間の五官に働きかける「感覚」の二つから成り立つものと考えられる。これらを、総合的にまとめたところに「道具」が生まれるのだ。

「道具」とは「造形」「技術」「機能性」「感覚」の4つの要素から成り立っており、これらの要素は常に相互に関係を持っている。例えば、技術の進歩により機能が発達したり、新しい感覚を得るために過去にない造形が作り上げられたりすることである。これらの要素の相互のバランスにより、優れた「道具」になると言っても過言ではないだろう。

私はこれを「道具」の概念と考える。

「住み継ぎ」について

「住み継ぎ」とはどのように考えられるのだろうか。「道具」を「住み継ぐ」と言うと、さらに理解は遠ざかってしまう。

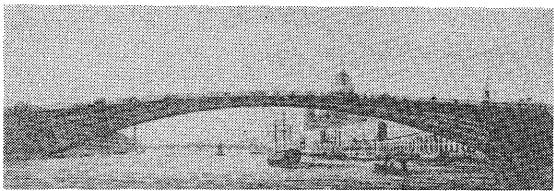
「住み継ぎ」という意味から必然的に、建築に付随した言葉として捉えがちになる。しかし、ここでは「道具」を対象としているため、多少解釈を拡げる必要がある。よって、ここでは「住み」よりも「継ぐ」を重視して話を進めようと思う。そうすれば、理解も容易となるだろう。

「地」があれば「図」があるように、「住み継ぐ」があれば当然「住み替え」もあると考えられる。これは、時間軸に沿って、受け継がれていくことが「住み継ぎ」であり、逆にある時新しいことに替わってしまうことが「住み替え」となるということだ。ここで出てきた「時間軸」は「継ぎ」という言葉からしても必要不可欠な観点と言える。

それでは、時代の流れ（時間軸）を主軸に「住み継ぎ」という視点で「道具」の4つの要素をひも解いていくことにする。

「技術」という要素

「技術」それは進歩の象徴であるとも言える。新しさへの追求が常につきまとった要素である。時間を遡って見てみてもいくつかの事例が挙げられる。

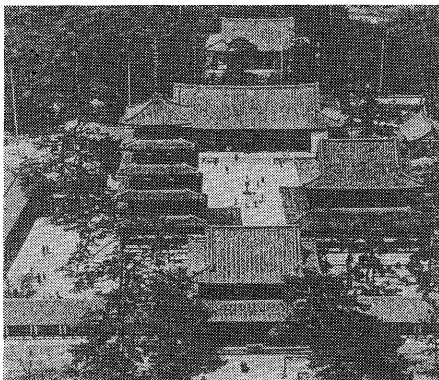


テムズ橋の計画 1801

18世紀初頭にロンドンのテムズ川に計画された橋。それまで、煉瓦や石が主流とされていた橋脚の素材に鉄が使われたのだ。この鉄という素材により、長スパンを飛ばすことが可能となり、構造的にも新しさを得たのである。この場合、非常に的確な判断に基づく「技術」の「住み替え」であったと言える。近年で言えば、急激なコンピューター環境の成長も同様の例として挙げられる。

また一方、法隆寺の修繕作業の様に新しい技術や素材を用いるよりも、過去の棟梁の経験に基づく技術を「住み継ぐ」方が適切な場合もある。

つまり、「技術」という要素は、その時代の技術力と対象物を広い視野で捉えることが重要であり、必要なことであると言える。



法隆寺／原色日本の美術より複写

「造形」という要素

周りを見回してみると、現代だけでも様々な形や色が溢れかえっている。単純に丸いものや四角いものもあれば、草花をモチーフにしたものもある。或いは、ものすごいスピードで走り出しそうな形のテレビやラジカセなども見渡せるだろう。歴史を振り返ってみても様々だ。アールヌーボーやアールデコといった様式の美しさもあれば、機能性の追求により余分な造形要素を省き、形作られたモダンデザインの緊張感あるバランスの美しさもある。その後、形の在り方を基に視覚への刺激を通して豊かさの向上を図ったポストモダンの華々しさ、そして再びモダンデザインに回帰しかけている現代。これら「造形」の変化はその時代性を反映して「住み替え」られてきたものだと言える。美しいものを安く一般生活の中に組み入れようと試みた結果生まれたモダンデザインの造形、バブル絶頂期に活躍し、バブルの崩壊と共に力を失ったポストモダンの華やかな造形など、いずれもそれぞれの時代性と繋がりを持っている。但し、現在、回帰しかけているモダンデザインの造形は時代性との関係が薄いように感じられる。モダンデザインの造形が様式化されてしまっているためだろう。もう少し深く時代性との関係を作るべきだと思う。

このように、時代との関係が顕著に現れてくる「造形」という「道具」の要素には「住み継ぎ」現象は存在しないのだろうか。いや、もしかすると現代におけるモダンデザインの造形への回帰が「住み継ぎ」なのかもしれない。

現代においては、時代性を反映させる要素が他にあるため、「造形」に対しては極力シンプルなものとしてモダンデザインの造形を一つの様式として捉えようとしているのかもしれない。今後も、他の要素に「住み替え」が生じた場合、その要素を強調するため「造形」はシンプルに抑えられることがあるだろう。とすれば、モダンデザインの造形は住み継がれていく可能性を持った造形と言えるかもしれない。

「機能性」という要素

過去において、椅子という道具は権力の象徴として扱われていた。それは座り易さという最高級の機能性ではなく、座る人の視線を高くしたり、座る人を飾り立てたりするものとしてであった。今でも企業の役員クラスなどでその風習は住み継がれているものの、多くの場合は、より座り易いという「機能性」への「住み替え」が行われていると言える。

「造形」では時代性の反映といった観点で捉えたが、「機能性」に時代性はあるのだろうか。例えば、現代を反映した「機能性」。

現在、その代表的なものとして「バリアフリー」といった考え方方が挙げられる。元々建築用語から派生したこの言葉は、高齢者や身体障害者など弱者が健常者と同様の行動を無理なく行える機能性を備えるといった意味であり、高齢化に向かっている現代社会では、まさに必要とされる考え方と言える。近頃、時代性を如実に反映するトレンドドラマの中でも、視覚障害者の役を演じる男優が手話を用いて愛を語っており、そこでは黄色いパトランプやファックスが伝達機能を満たす重要なアイテムとして扱われていた。このような、社会的現象は「機能性」の「住み替え」を要求していると言える。時代の変化は、必要とされる機能も替えていくのだ。

「感覚」という要素

「感覚」は個人差といったものがあるため、非常に捉え難い要素である。

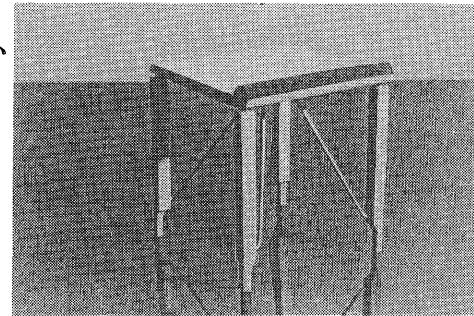
昔、ライト兄弟が、空を飛ぶ道具飛行機を作った時、「感覚」の追求から始まったと言われている。空を飛びたい。飛んで、空からの地上の眺めを見てみたい。空の空気を肌で感じたい。そのようなことを思ったのだろう。その「感覚」をつかむことを第一に考え、飛ぶことに成功したのだ。空体力学などの知識は、その後に身につけたと言われている。

男の子がパイロットを夢みることに通じる所があるのでないだろうか。ここでの「感覚」は住み継がれていると言えるだろう。或いは、これは住み継がれて当然とも言えるのかもしれない。なぜなら、「感覚」とは人間が備え持つ最低限の要素と言えるからだ。人間が人間でなくならない以上、住み継がれてくれるのだろう。

但し、近頃のことに関して一つだけ気になる「住み替え」行為がある。「バーチャルリアリティー」だ。疑似的な体験によって、ある感覚を得ようとする行為である。はたしてこれは適切な「感覚」の「住み替え」と言えるだろうか。バーチャルリアリティーを今後、住み継いでいくべきだろうか。疑問が残る。

あるコンペティションで、このような「住み替え」行為を否定し、本物の「感覚」を導く家具の提案を行ったことがある。感覚の刺激により、人間の精神面を揺さぶり、生活に豊かさを創造するといった椅子の提案である。

平板とその一边に付けられた円柱というこの椅子の持つ特異な形態が感覚を通じて、心の中に心地よいもう一つのかたちを創り出す。ももの裏側に触れる膨らみが優しく体に溶け込み、椅子と体の境界を変化させるのだ。人がこの変化に気付く時、触覚を通じて得られるこの小さな体験は心に刺激を与え、精神的豊かさを高めると同時に生活を豊かなものとする。といったプロトタイプとしての提案であった。新しい「感覚」の「住み替え」を狙ったものである。



「感覚」の住み替えを狙った椅子

岐阜県の養老町に創られた荒川修作氏による「養老天命反転地」と呼ばれる作品も「感覚」の「住み替え」という点で同様の考え方ではないかと思う。

疑似的体験といった行為に対して、肯定はできないが、「感覚」の追求といったことに対する共通である。そこにあるのは本物か偽物かの違いだけだ。しかし、当然本物である必要はある。「住み替え」も「住み替え」方を誤ると人間の本質が失われてしまう危険性を持っている。いずれの要素の場合もそうだが、そこには慎重な判断が要求されると言える。

正しい「住み方」

優れた「道具」はすべての要素の相互のバランスによって成り立つと先に言ったが、これは「住み継ぎ」と「住み替え」の的確な見極めに通じるものとも言える。住み継いでいくだけでもなく、住み替えていくだけでもない人間の本質を的確に捉えた「住み方」が、今後、人間を官能的な生活へと導いていくのだろう。

では、その「住み方」とは一体どの様なものなのか？

それは、人間の欲求だけが知っている。



「あっ！あの猿、笑っているよ。」君は言った。
その猿は、おいしそうに果物をほおばっていた。

まつおか ともゆき（プロダクトデザイナー）

こわれゆくものへのまなざし

加 藤 雅 久

新・東京礫層

東京の地下数十メートルのあたりに、石片が堆積した固い地層がある。これを「東京礫層」といい、建築物の支持杭はここまで達している。最近の地下鉄は、用地取得や障害物（建物地下階や支持杭、各種敷設管路等）の問題から、個人の所有権の及ばない大深度地下空間を利用するため、この「東京礫層」を掘り進むことも多い。地下鉄工事で遺跡が出たという話を聞かなくなつたのも、そのせいかも知れない。

東京の地下を掘ると、様々な遺構・遺跡が出てくる。なにしろ数百年の首都の歴史が折り重なって眠っているのだから、出ない方が珍しい。もっとも、火事や立て替えで滅失した木造の遺構が殆どだから、東石と茶碗のかけらぐらいしか残っていないだろう。一方で、現在の我々もまた、遺構を埋葬し続けている。コンクリート建造物は耐用年数を過ぎると解体される。解体されたコンクリートは数十センチの塊（ガラ）に小割され、中間処理工場に運ばれて、ここでさらに篩い選別と小割を繰り返し、さまざまな粒度の再生路盤材がつくられる。このようにしてできた路盤材は、その名の通り舗装道路の下敷や土留の壁の裏込め材となる。近頃は処分費用の節約や廃棄物の減量化を考え、解体時のガラを現場で小割して割栗に再利用することが多い。この方法はもはや主流となりつつあり、そのための小型自走式ガラ破碎機も使われ始めている。やがて、都市部の地下数十センチは全てガラで埋めつくされることになるだろう。私は、このガラの地層を、「新・東京礫層」と呼んでいる。

飽くなき欲望のゆくえ

新・東京礫層の厚みはとどまることを知らない。今もなお、さまざまな建築物が造られ、使われ、飽きられて、壊され続けている。建築物は、老朽化のために撤去されることは稀である。新たな欲求を満たすため、新しい建築物が求められる。既存の建築物は飽きられ、新しい建築物にその場所を明け渡す。経済活動があまりに高速度になると、解体と建設が逼迫し、建築物として存在できる時間すら危うくなる。役割を終えた建築物は、建設に比べて遙かに劇的な速度と方法で解体され、われわれの知覚の外に速やかに運び去られる。その建築物に関する記憶と一緒に。

▼コンクリート建築物の解体工事



ものを知覚の外に掃き出すことは、この上ない快楽を伴う。廃棄の快楽は新たな生産の活力となり、一切の活動を滞りなく進める大切な役割を担っている。廃棄は、生理的には極めて健全な行為である。もし廃棄せずにただ溜めおくままであるなら、我々は、廃棄欲求のはけ口をどこか他に求めなければなるまい。

建築物は使用時間の長さゆえに、紙や瓶と同じ消費財として意識されることはない。しかし、解体後はやはり消費財としての運命が待ち受けている。解体廃材は中間処理場で分解・選別された後、再利用できるものを除き、産業廃棄物として都市周辺の山中にある安定型処分場に埋葬される。産廃の何割かは建設系廃棄物であるが、現在ある処分場はもう余裕がないといわれている。現に、人目につかない山中は不法投棄された遺骸が人々としているし、道路や建築物の下もガラに埋め尽くされている。捨てられた建築物が我々の目の前に溢れ出るのは時間の問題だ。そのとき、我々は新たな廃棄欲求のはけ口をどこに求めるであろうか？

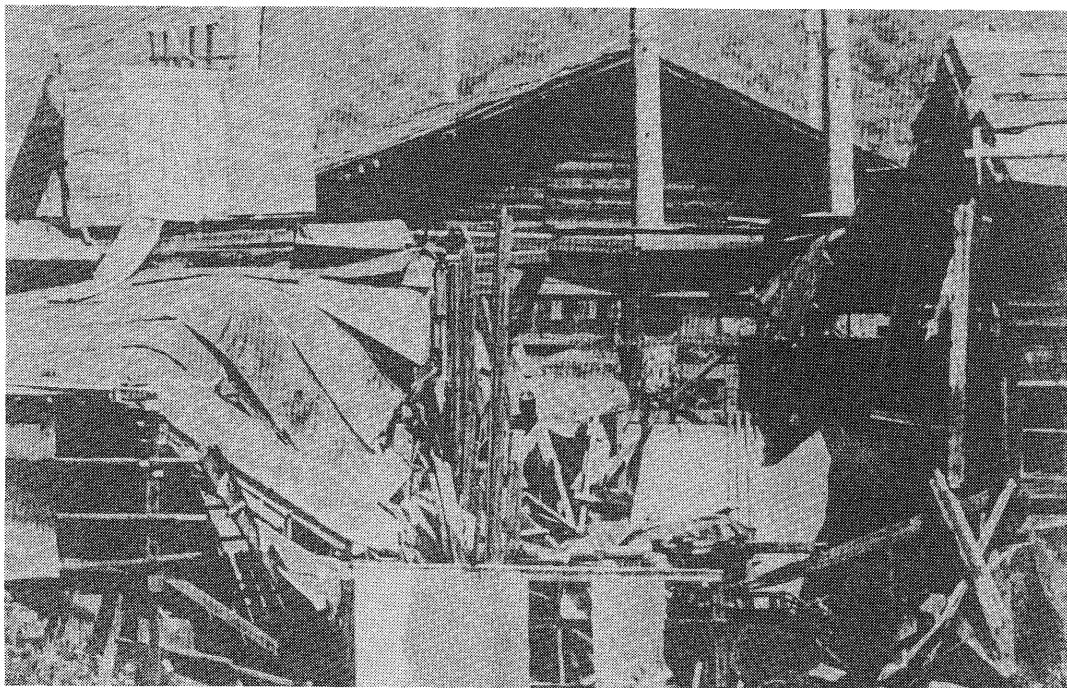
もうひとつの「死」をみつめて

飽きられた建築物は、よほどの理由がないかぎり、そのまま放置されることはない。殊に日本では、用途を失った巨大な軀を安住の地を与える余裕など無

いに等しい。しかし、権利関係等の法的な事由や経済的事由等で解体が困難な状況におかれているために、偶然に廃墟として存在し続けているものもある。

私はそのようなものたちに、幸運にも、いくつか出合うことができた。いづれも「死」後数年から十数年のちの姿であったが、廃墟の中に立つときはいつも、ある種の不思議な安らぎを覚えずにはいられないである。もっとも、そう感じるのは、建設と解体を繰り返す忙しない日常に対する反動が大きいからだと言えなくはないが、かといって真夜中の無人のオフィス街で感じる静けさとは明らかに異なる。全く静止している時空間に立っているわけではなく、何か、我々には知覚できなくなるぎりぎりの速度で、緩やかに崩壊していく動きを感じるのである。自分自身の身体も微細な速度と規模で崩壊していくような、奇妙な安堵感。腐乱する死体とは異なった、超長期的な崩壊過程の一断面。時の流れはなく、ただ時間の方向のみが存在している世界である。

しかし、もし何十年もの間コマ撮りできるビデオカメラがあったとして、一日1コマ撮影し再生してみたらどうだろうか。恐らくそこには、蠢めく樹木に蝕まれ、屋根や床が腐り陥没し、四方の柱で立ったまま、壁が溶けるように剥脱し散乱していく過程が生々しいほどに映し出されているに違いない。廃墟は我々の知覚を超えた時空間の中で、軋み、のた打ちながら、腐乱しているのだ。



▲岐阜県・河合村の廃集落

体温のない表層

ひとたびこのような幻覚に囚われると、建築物を見るたびに、それがやがてどのように腐乱していくのであろうかという、極めて猥雑な期待と幻想を抱くようになる。湿潤した茅葺に密生する色彩々の菌糸類、ひび割れたコンクリートの目地を押し抜げる草木の根……しかしネグロマニアックな視線をいくら投げかけても、それに応えてくれる建築物がそはあるわけではない。最近は、自然の作用に身を任せ蝕まれゆくことをかたくなに拒絶する建築物があまりにも多くなっているのである。

例えは毒々しいまでに一面真っ白に輝くぱちんこ屋。パステルカラーの外壁にクロームメッキの目地を施した商業ビル。ここ十数年で、都市の表層は随分変わってしまった。これら建築物を覆う皮膚は、いつまでも美しさを保ち続けるため、複合化された人工物で造られていることが多い。しかもそれらは大抵数年で化粧直しを施されている。常に若々しい皮膚を求め続け、飽きてどうにもならなくなると解体する。打ち碎かれた皮膚は自然界で朽ちることもなく、瓦礫の山で燐然と輝き続けている。もとの軀は失われてしまっているのに、だ。そのような建築物に、死の匂いを嗅ぎとることなど不可能だ。恐らく、これを生みだした人たちでさえ、崩壊する過程など想像だにしなかったであろう。そう、これらのがらくたは、始めから生も死も与えられてはいなかったのだ。

※

※

※

死の匂いを感じさせる建造物には、底知れぬ力が潜んでいる。その力は、住まい手と共にあるときに湧き出してくる。住まい手に働きかけ、住まい手の身体性を映し出しながら、自然の力に抗して共に生き延びようとする活力が溢れている。住まい手を失った時、建築物はその役割から解き放たれ、我々の知覚を超えた消失点に向かって崩壊し始める。死を与えられているからこそ、住まい手と共に生きることを知っている。自分の置かれている環境と見つめ合い、積極的に関わり合おうとする住まい手なら、生も死もないがらくたとは、共に生きようとする気持ちは持ち得ないだろう。それゆえ、がらくたは飽きられ、無視され、壊され続いているのかもしれない。

既に我々の足下は、この体温のないがらくたでぬかるみ始めている。一体、我々はこれからどうしたらよいというのだ。この生も死もないがらくたを！

かとう まさひさ（東京理科大学工学部建築学科 真鍋研究室 助手）

三つの手

高橋大助

大学生のとき、民俗調査のための採訪旅行に何度か参加した。調査と言っても、民俗学を志す学生のための実地研修を兼ねたものであったから、あまり大きな学術的成果が上げられはしなかった。しかし、その採訪旅行で、今も心の中にあり、時折、取り出しては考えてみる、そういう〈場面〉に私は出会った。

琵琶湖の湖畔のある集落に行ったときのことだ。どういう経緯であったか忘れてしまったが、三名の老人に集まってもらって、話を伺うことになった。いずれも男性で、ほぼ同世代の彼らは、始めのうち、こちらが訊ねたことにポツリポツリと応えるばかりであったが、次第に三人で昔話に興じる風になった。そうした雑談の中から糸口を見つけて、必要な話を訊き出すのが、採訪者としての腕の見せどころなのだが、素人同然の私にはその技術はなかった。

採訪のベテランであった同行者も、よい糸口が見つかぬらしく、黙って話を聞いていた。だんだんと気持ちに締まりがなってきて、三人が話す様子をぼんやり眺めるようになってしまった。話は耳を素通りしていく。

採訪者としては失格もいいところだが、そのうち不意に、私の視界の中で〈前景化〉されたものがあった。

〈手〉である。

三人の老人はそれぞれ違う職種の仕事を経てきていた。一番若く、まだ現役の農夫である人は、古い十円玉のような色をした手を持っていて、その爪には、土が入り込んでいた。仕事の大部分を後継者に任せた老神官は、白くふっからした、女性のような手であった。

いま一人は、左手の薬指が第二関節の辺りで欠損していた。喜寿を越えていた彼の浅黒く太い残りの指は、精悍さだけでなく、繊細な印象があった。

湯呑み茶碗を持ったり、扇子を取り出したりという、ちょっとした動きをするとき、その印象が際だった。かつて彼は、漁のための仕掛けを作ることを生業とし、その細工の見事さゆえ、土地では名人と呼ばれていたのである。

*
*
*
*

この三人の〈手〉は、私の心を強くつかんだ。〈手〉は老人たちの人生の質を表現していた。〈手〉には、彼らが〈地域〉で果たした役割が刻印されていた。個人的な出来事の集積である筈の人生は、その刻印に収斂されてしまっていた。彼らの〈手〉は個性を表現してはいなかったのである。私が〈手〉に見たのは、〈地域〉の持つ暴力の痕跡であった。

しかし、その〈手〉が堂々たるものであることも確かだった。彼らの〈手〉こそが民俗だとえた。そして、こうした〈手〉を持つことをよしとする人こそが〈地域〉を受け継ぎ得るのだろうと思った。後に、ヴァナキュラーという言葉を聞いて思い浮かべたのも、老人たちの〈手〉であった。

その経験のせいか、例えば、民家の移築・再生というような運動に対して、あまり熱心になれない。もとより、こうした民家が嫌いなわけではない。

見ていたいし、触ってみたい。保存すべきだと思う。しかし、自ら民家に係わることには躊躇してしまうのである。ひとつには、こうした民家を生み出した〈地域性〉への恐怖の念ゆえ、旅行者にしかなれない自分は直接手を触れるべきではないよう思ってしまうためもある。いまひとつには、民家に関係することで、私が本当に問題とすべき〈場所〉を見失ってしまうのではないかと思われるからである。

私が育った東京都下の新興住宅街には〈雑木林〉などの自然や〈氏神さま〉などの民俗的な語彙もまだかろうじて残っていたが、それらは私の生活に深く係わってはこなかった。私にとって重要であった場所は、住宅街の中の小さな空き地や滅多に車の入ってこない道路であつただろう。私は仲間と、そこで可能な遊びを工夫することを通して、自分を作っていたのである。

民俗とか、ヴァナキュラーとかの言葉は、ふさわしくないだろうが、〈実存のテリトリー〉という言葉を用いることは許されるだろう。空き地の形のいびつきや狭さ、アスファルトの皮膚感覚などが、私を形成したのである。私はそこにこだわらなければならない。そして、その〈場所〉の力を後の時代に伝えられたとき、はじめて、あの三つの〈手〉に対抗できるような気がするのである。それにはどうしたらよいのだろう。残念ながら、民家のように移築再生して住み継ぐという訳にはいかない。もっと違う方法が必要だ。

〈文学〉がその方法のひとつであるかも知れない。

たかはし だいすけ（国学院大学・特別研究生）

父の仕事

日影良孝

父は僕が生まれる前から岩手で大工をしていた。

僕は、寅年生まれで、父は二まわり違う寅年生まれである。父は中卒で大工になったから大工のキャリアは、40年ぐらいになる。

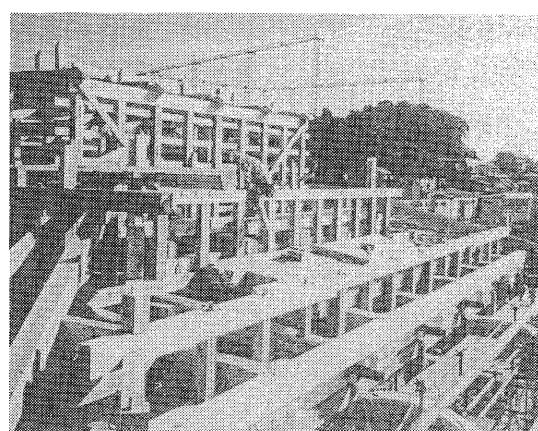
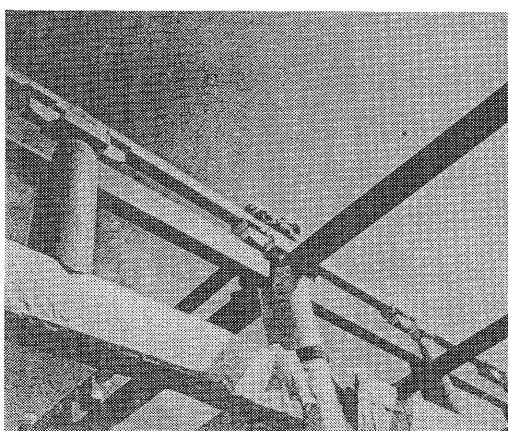
だからどうだという訳ではない。僕は中学から酒を飲んでいて、父の仕事に、てんで興味がなかった。自分のことで精一杯だったのだ。

父の手伝いなど一度もしたことがなかった。それでも木に対して興味がないわけではなかった。それは現場で余った材料で船や彫刻などを作ったりする遊びの道具としての木の素材であった。しゃせん遊びだったから、父の大工道具を勝手に借り、平気でノミの歯を痛めたり、ノコギリを真二つに折ったりしても、僕は何とも思わなかった。そんな僕を、父は、幼い子供の悪戯だから、怒鳴ってもしょうがないと思ったのか、あるいは大工道具を使って、なにかを作ろうとしている息子の姿がほほえましいと思ったのか、見てみぬふりをしながら僕が痛めたノミを研いでいた。そんな風だから、父の仕事は？と聞かれても大工であるという事実と木のにおいと答えるしかできなかった。

母は父は儲けが苦手だと、しきりに愚痴をこぼしていた。

当時の僕には、母の言葉は耳に入ってこなかった。なぜなら自分ですることで精一杯だったから。父も母も僕を比較的勝手に生かしてくれた。

高校を卒業することになり、僕は小学生の頃から何となく夢に描いていた建築という道に進むことになった。とりあえずどこかの学校に行かなくてはと思ひ、東京のとある専門学校に通うことになった。



慈眼寺工事風景・骨組み

入学ために夜行電車で父と共に上京した。

父は夜行電車の中で何を思っていたのだろうか。……僕は田舎に残してきた恋人のことで頭がいっぱいだったから、上の寝台に寝ている父の気持を考えることができなかった……きっと父は僕に大工になってほしかったのだ。

僕が大工にならなかった代わりに弟が大工にさせられた。弟から見れば僕は、世の中によくいる自分勝手な長男息子のように見えるだろう（弟の態度がそう言っている）。

建築設計の道に進み、少しづつ建築を知るようになり、それと共に、父の技術が、徐々に僕の中であきらかになっていった。ある時期から木造の設計が多くなってきたことで、父と僕の技術格差を知る契機にもなっていった。

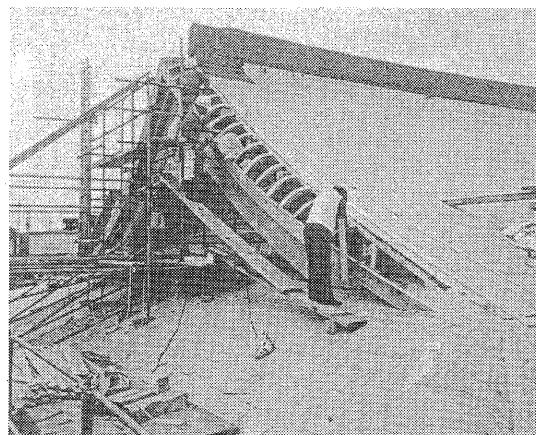
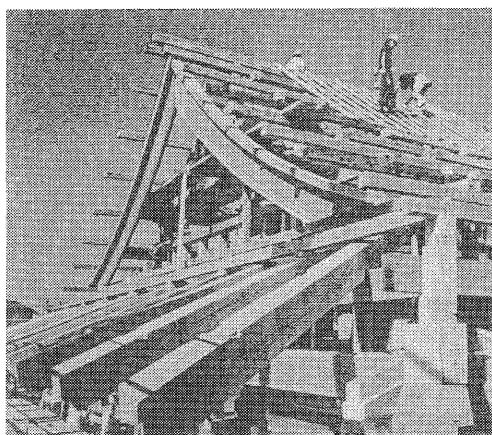
一般の木造住宅が多かった父は、いつの間にか社寺建築を中心に仕事をするようになっていたから余計に僕と父の差が気になるようになった。

けして父を自慢する気はないが、外にばかり目を向けてきて、身近なところに「伝統的な仕事をする職人」がいたということに気がつかなかった反省と新鮮な驚きを、素直に表現したくなつた。

その仕事は、神奈川県藤沢市にある慈眼寺本堂の新築工事である。弟も含めて多くの職人たちと一緒に泊まり込みで仕事をしている。墨つけやキザミは父を中心となって行ったそうである。

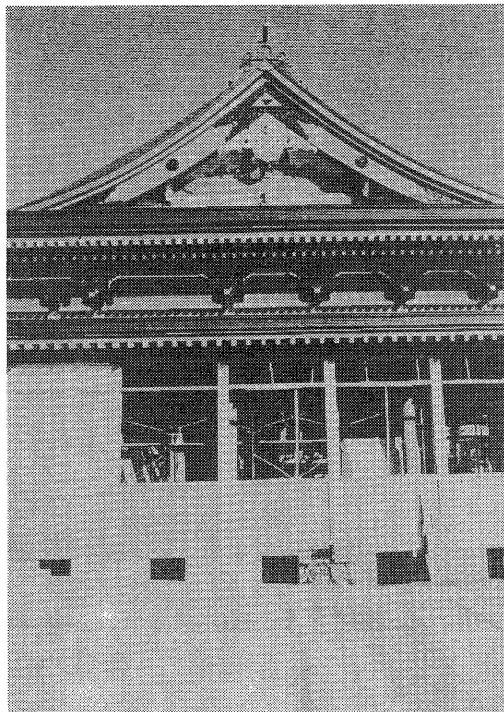
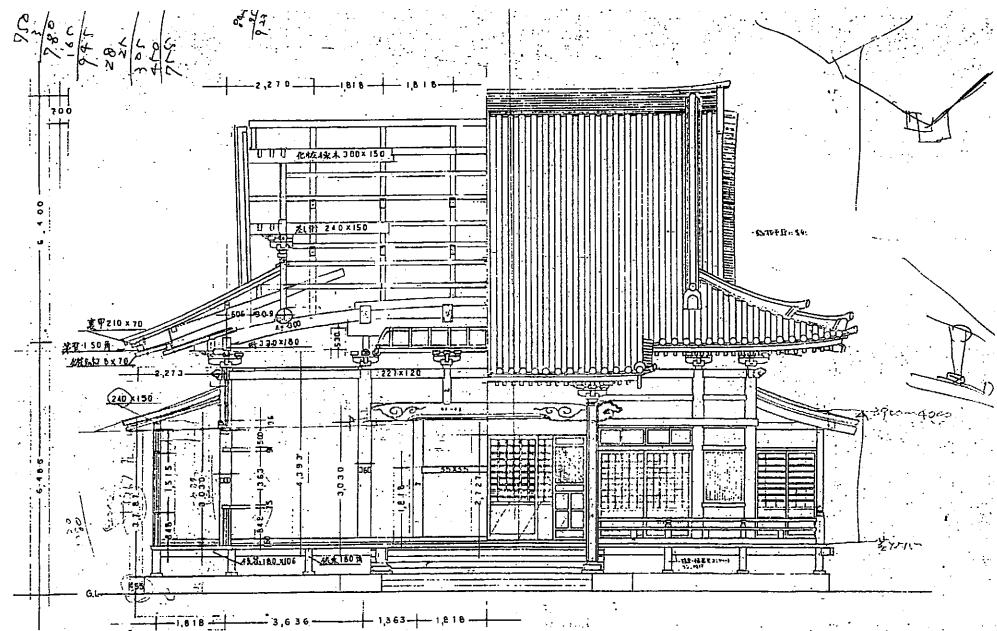
いつか僕が設計図を書き、父が工事を担当する機会が将来訪れないかと最近思う。その機会が来た時、僕はどのように父に接するのだろうか。逆に父は僕の図面を見てどんな風に感じるのだろうか。楽しみでもあり不安でもある。

ひかげ よしたか



慈眼寺工事風景・屋根

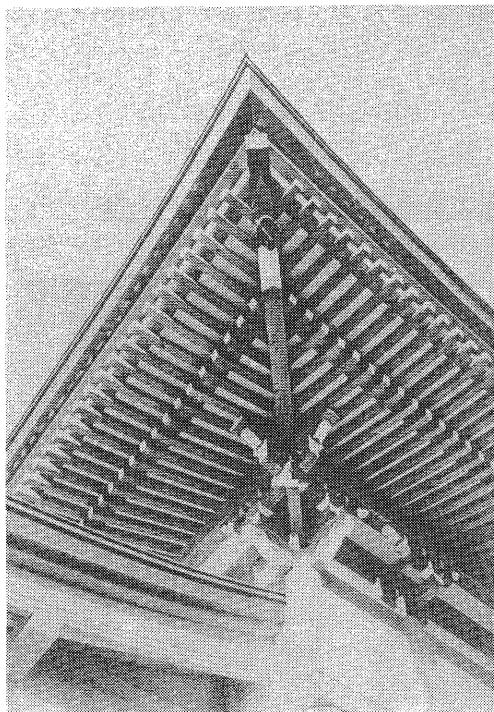
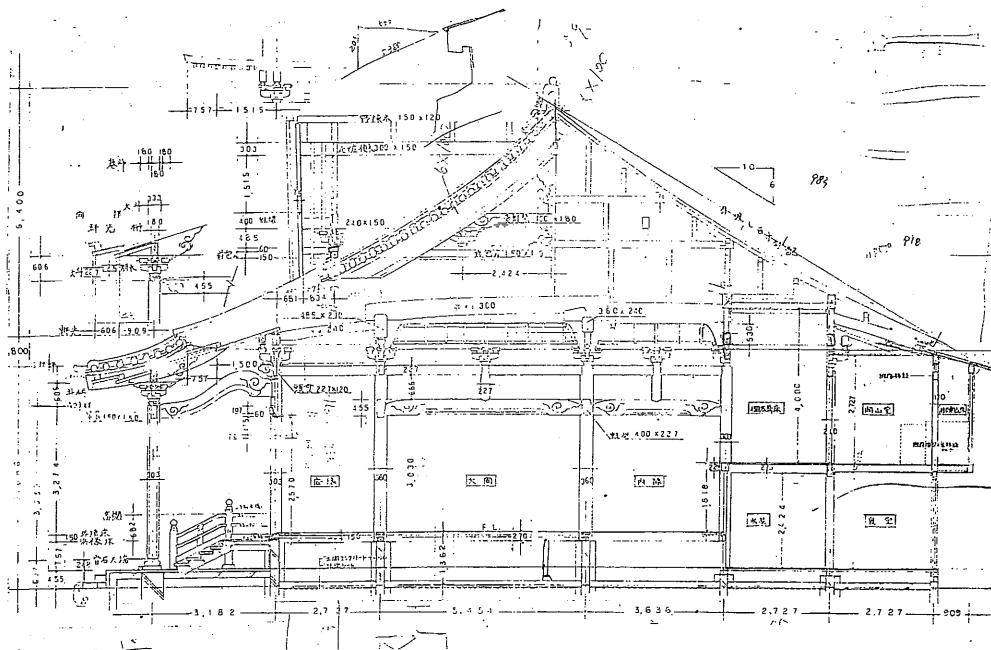
父の仕事・図版集



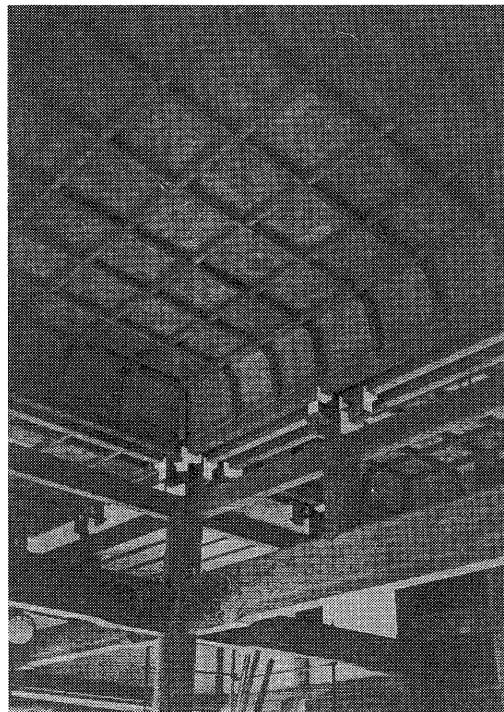
慈眼寺工事風景・妻側詳細



慈眼寺工事風景・妻側全景



慈眼寺工事風景・軒裏詳細



慈眼寺工事風景・内部空間

寺は町や生活の人生の余白である

日影良孝

余白と時間の消失

都市を見渡しても、新たに開発された地方の新興住宅地を歩いてみても、かつて心の拠り所となっていた「意味もない空き地」や「まちの片隅の路地」がなくなりつつある。そして人々の語らいの場を示す象徴的な言葉であった「井戸端会議」という概念も、もはや死語になり忘れ去られた。

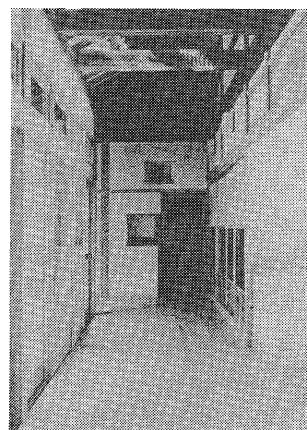
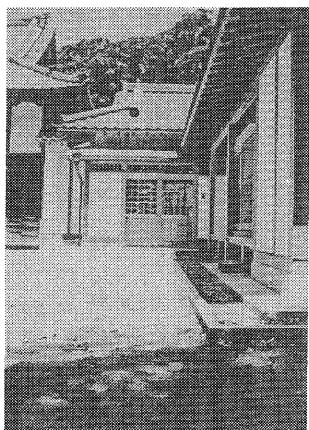
商店街を賑わせた八百屋や魚屋や肉屋も「顔の見える大切なふれあいの空間」であったのに、駅前のスーパー・マーケットやコンビニエンスストアの宣伝力や商品の低価格化に押され、買い物は生活の中の単なる事務処理的行為と変わってしまった。

情報の流通は、追い付くことが不可能なぐらいな速度で進化し、キーボードを押すだけで人ととの交流までもできるようになってしまった……お互いの身体の温度や微妙な表情の揺れを感じる機会が確実に減っていく。

役所は、潤いあるまちづくりと称して、古いまち並みを撤去し、ハード面の整備を急ごうとするが、完成されピカピカ乾いた町からは、長い間培われてきた時間の堆積に包まれるような安らぎは到底感じることはできない。町は余白と時間を消失した。

寺は私達の余白である

まちにも生活にも人生にも、整理規格化できない、不確定な余白を残していく必要がある。それが潤いというものとはいえないか。



曹洞宗 天性院・庫裏客殿 外観・内観写真

唐突ではあるが、寺は私達のまちや生活や人生の余白であると、あえてここで言う。寺の境内は、誰も犯すことのできない聖域であるから、自然が豊富に残り、子供達が遊べる土のままの広場もある。そして何よりも深い歴史が堆積され眠っている。人は意識的にせよ無意識的にせよ、必ず死ぬことを知っているから寺の存在を忘れる事はない。だから寺に行けば自己の死を見つめ、そして先代の記憶と出会いことが可能な場所としてこれからも生き続けていく。

一人の住職

私の寺へのこだわりは、一人の住職からの影響が大きい。

住職は昔からあまり多くを語る人ではなかった。昔からという言い方をするとかなりの年配のように思われるが、そうではなくて幼少からの同級生であるから、このような生意気な言い方をしている。

建築設計者という立場で庫裏殿建設に係わさせていただいたことも住職の人間性を知るのに役立った。

住職に「あなたは良寛のような感じの方だ」と酒を飲みながらほとんど本氣で話したら、ただ笑ってなにも答えてくれなかった。つまりあらゆるもの拒むことせず受け入れる深さを持っていた。

たとえて言えば「白い紙」。

人は真白い紙に絵を描こうとする瞬間、不思議な緊張感と喜びを感じさせてくれる。日常の生活空間には「白い紙」は少ない。常に何かが描かれている。しかも余白を残さず紙全体に描かれている。私にとっての寺は、住職の存在まで含めて、まちや生活や人生の余白だと思い、そうであることを期待している。

ひかげ よしたか

配置図

住み継ぎ採集アンケート



日本の伝統的な民家が消滅の一途をたどっていると云われ続けて久しい。確実に少なくなっていることは、誰が見ても疑う余地はないが、残り少ないけれども、まだ残っていることも確かなことである。

民家が多く残っている地域は何処かと、良く聞かれことがあるが、日本全国調査したわけではないから、はっきりしたことはわからない。いい民家かどうかは別として（いい民家と呼ばれるものは、いったいどういう家なのか…）僕が知っている限りでは東北地方、東京・神奈川・埼玉を除く関東地方、北陸地方、中部地方には、点々とあるが残っている。

民家の資料に取り上げられているものは、どれも時代的に古いものか、文化財に指定されているものがほとんどであるから、恐らく僕の目にとまる民家は、彼らの評価から落ちこぼれたものであろう。平成の時代の今、その評価の基準も早急に変えていかなくてはならない。幸い文化庁の「近代の文化遺産の保存活用に関する調査研究協力者会議」で築後50年前後までの建造物も国宝や重要文化財の対象とすべきだと報告されたが（詳細は月刊文化財に掲載・平成8年1月号・第1法規）国ができるることは、凍結的保存までが限界で、住まいを継承していくという観点での動きまでは、期待できない。

そこで私達がやらなくてはならないことは何か、と考えると以下のような事が思いつく。

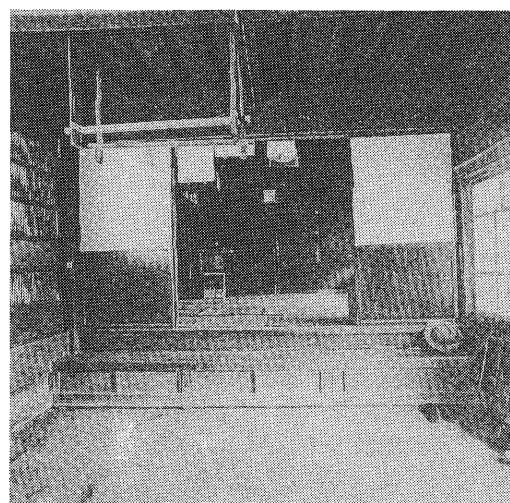
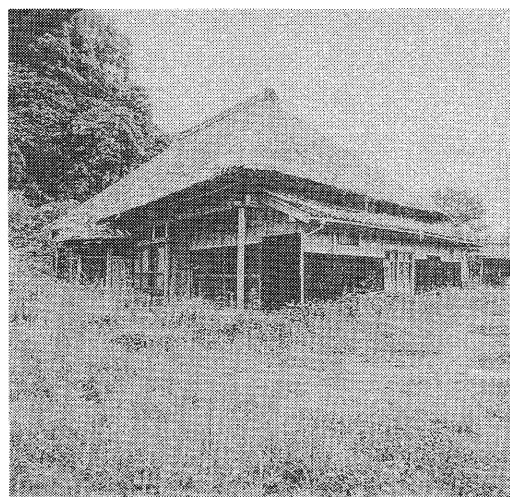
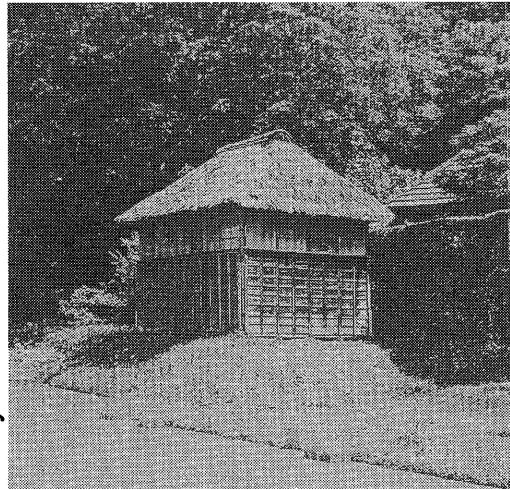
- 1、現時点で現存する民家を把握し調査記録を残す。
- 2、同時に民家で生活している人と、その家の重要性を共に考える。
- 3、次に民家を住み継いでいくためには、つまり現代の生活に継承していくにはどのような住み継ぎ方があるのか可能性を探る。

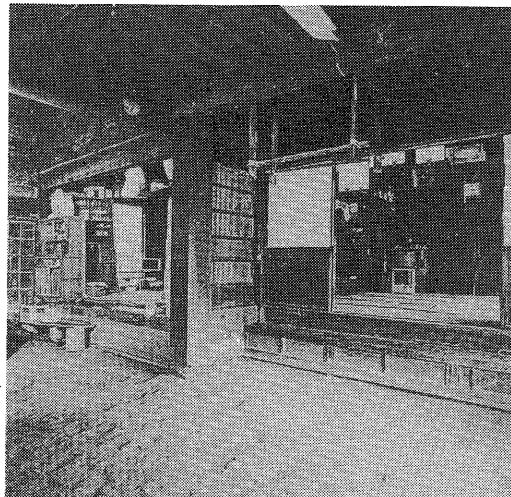
可能性の道を開くには、困難を極めてしまうと想像できるが、とりあえず自分が今いる場所から始めなくては何も進まないだろう。

※

知人に芝原人形作家の千葉さんという人がいる。房総上総の睦沢町に住み、アトリエを長南町に構えている。宮城県山元町の民家の移築再生の設計依頼を受けてからのお付き合いである。千葉さんは民具の研究者としても知られ、民具と共に民家を愛する情熱あふれる方である。

民家との出会いは人との出会いと重なる。房総上総に多く民家が残っているのを知ったのも千葉さんと出会ってからである。東北岩手生まれの僕には、東京も千葉もイメージとしては、同じ地域であり東京の一部としてとらえていた。ところが千葉は田舎だった。（次頁へ続く）





山並みと農村風景が延々と続き、幹線道路から一歩入るといまだに茅葺きの民家で生活している人が、たくさんとは、けして言えないが長南町・睦沢町だけでも30棟を越す。しかしこの地域の民家も時代の流れに逆らえず、茅屋根に鉄板を被せて残している家はいいほうで、新築のために解体される消滅寸前である。

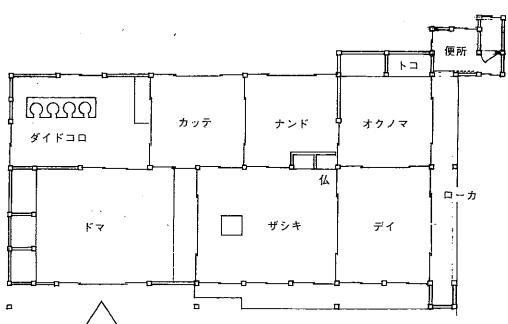
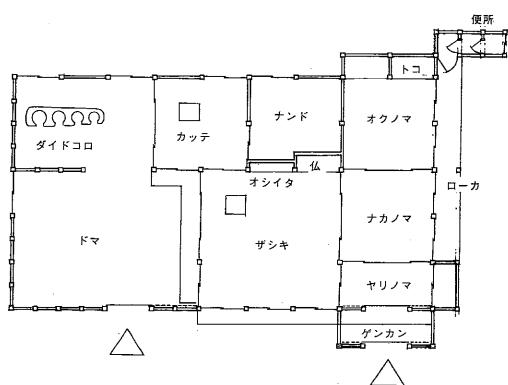
ここで紹介する民家の写真は、千葉さんと僕が探し歩いた民家の記録の一部である。撮影は骨董や人形を撮られている写真家・大屋さんのものである。調査記録のまとめは現在行なっている最中でここではまだ紹介できない。

房総の民家に興味を持っていただく契機になってもらえたらしいと思う。

※

前述したように「民家」が日本にどれだけ残っているかを知る必要があると考えている。しかし数限られた人間と少ない時間では作業の限界があるから、この誌面を借りて民家採集アンケートを募集しようと思う。生活文化同人機関誌の読者は全国に広まるだろうから、幅広いデータが集まることが期待できそうだ。伝統的な民家でも数寄屋建築でも洋館的なものでも、木造以外のものでもいい、なぜなら、人それぞれが残す価値があると思ったものが、継承すべき建物だと定義できるからである。アンケートが集まったら、生活文化機関誌に発表する予定である。

ひかけ よしたか



房総上総の民家・間取りの基本

住み継ぎ探集シート(アンケート編)

- アンケートの端切りは特にありません
- このページをA4サイズに拡大コピーして使用して下さい。
- 身近な町を歩いていて気がついた家や建物があつたら教えてください。
- アンケート項目は、書ける範囲で結構です。
- 探集シートを記録していただいた方は、以下の住所までお送りください。
- 探集シートを送っていただいた方全員に、今回の「住み継ぎ探集シート全記録集」を送ります
- 探集シートの送り先
〒249 神奈川県逗子市久木7-3-2-1 日影良季 電話0468-72-3431

探集日

建物の住所

建物の持ち主の名前

建築年代

建物の特徴

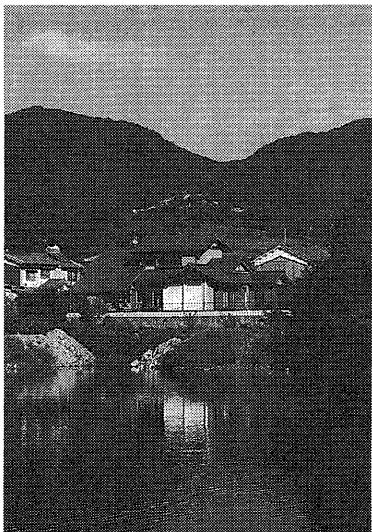
主な外部仕上材料

主な内部仕上材料

この建物から受けた印象

この探集シートを送って頂いた方の名前と連絡先

このスペースに探集した写真を貼って下さい
概略の間取り図や特徴ある部分のスケッチをしてくださいとも結構です
写真やスケッチが入りきらないときは、裏面で表現してください



「奈良、山の辺の家」

施工：奈良住宅建設関連事業協同組合

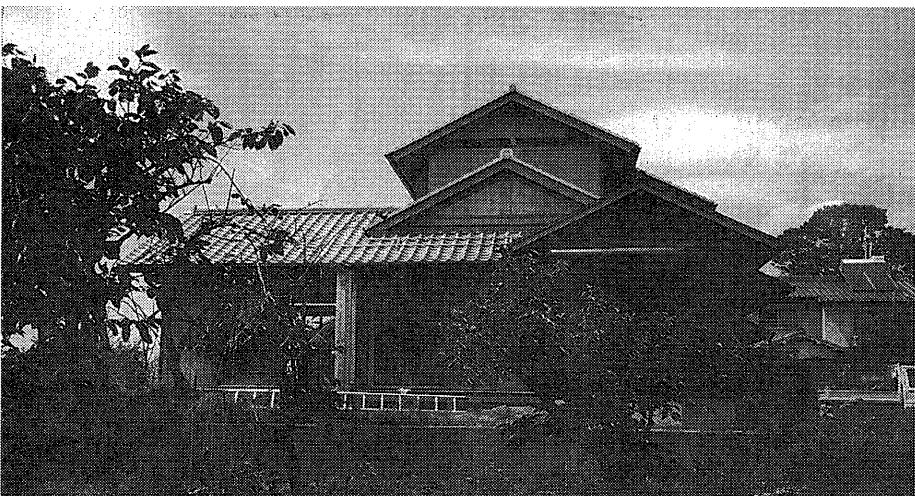
設計：長谷川順持

ファニチャーコーディネイト：松村陽子（イトキン）

倭は国のみほろば 畠づく青垣

山籠れる 倭し麗し

国邦歌（くにしのびうた）に描かれた風景が残る地。
三輪山の麓から始まる古道「山の辺の道」のほど近く
に佇む家。



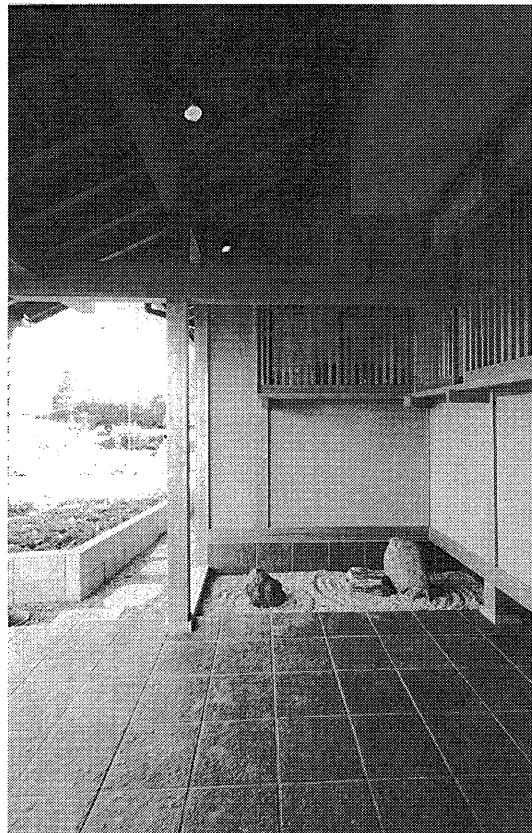
(上) 溜池対
岸からの姿

(中) 西側の
姿

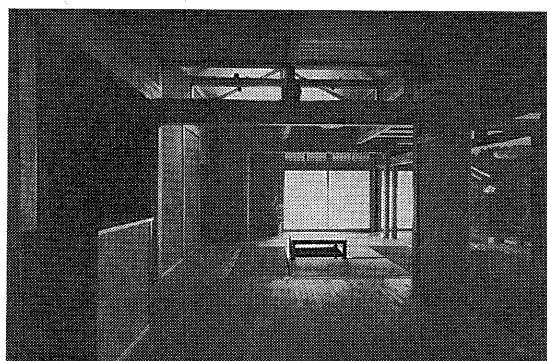
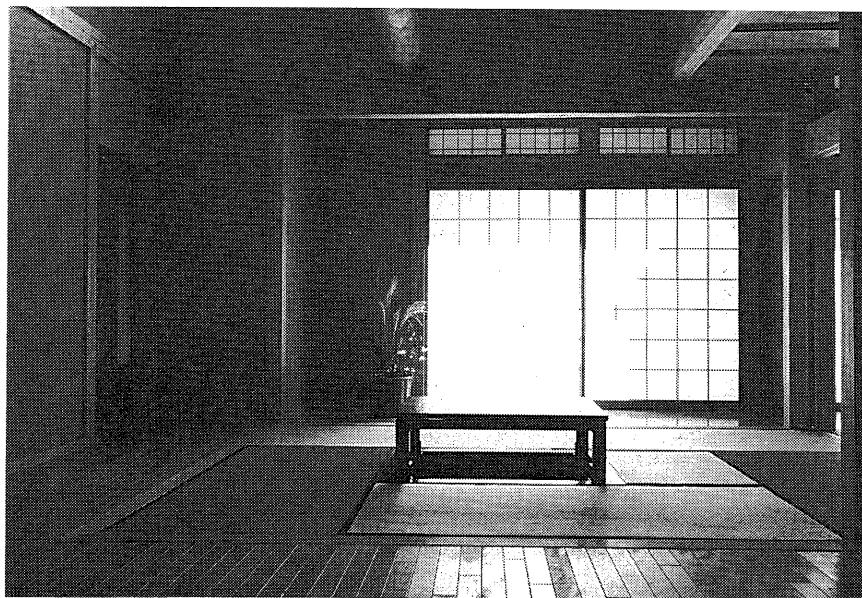
(下) 南側、
複数の妻の
重なり



さかのばれば、既に3年の月日が経っている。「居住新時代の木造住宅」と題した実施設計競技で最優秀賞をいただき、その案をベースに再設計した住宅がこの「奈良、山の辺の家」。三輪山を東に従え北には巨大古墳、西には溜池そのむこうには墓の集落。しかも、2項道路に面している。モデルハウスの立地としてはあまりに特殊な環境条件。しかしこの周囲の風景がもつ力は何だろう。その力に押されるようにしてできあがった5寸勾配の「屋根の家」である。



(上) 東側、スキップフロアを上昇雁行した
切妻が覆う
(下) 玄関ポーチ廻り。出桁による深い軒

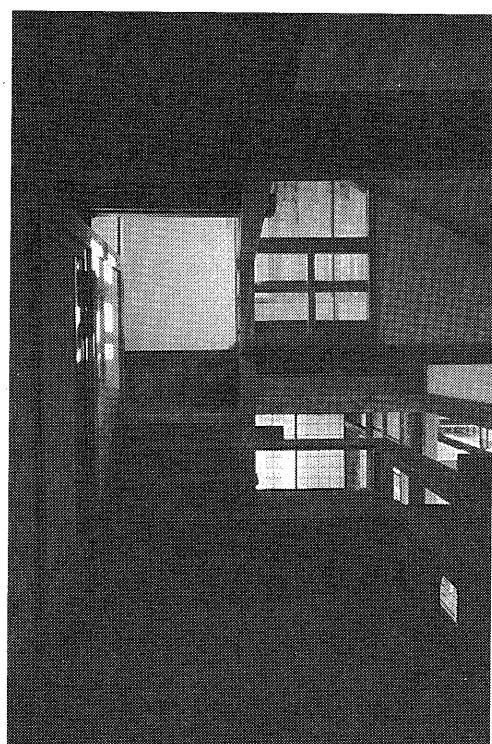


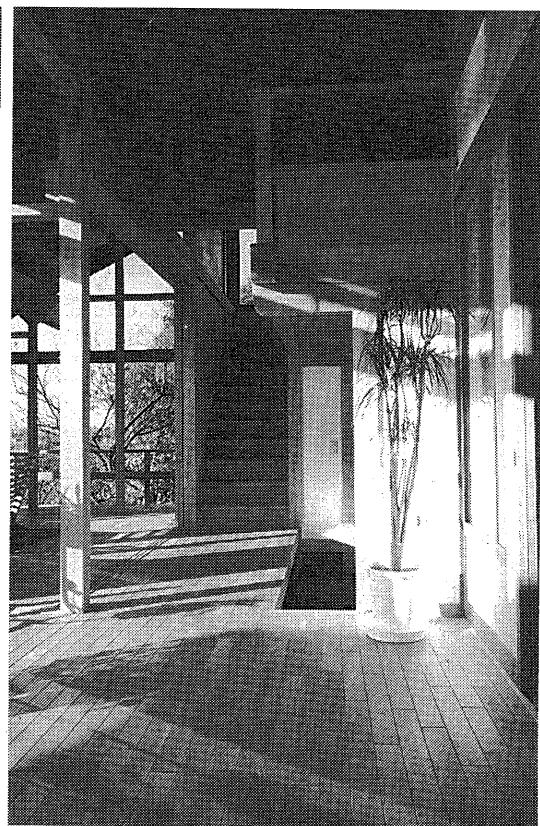
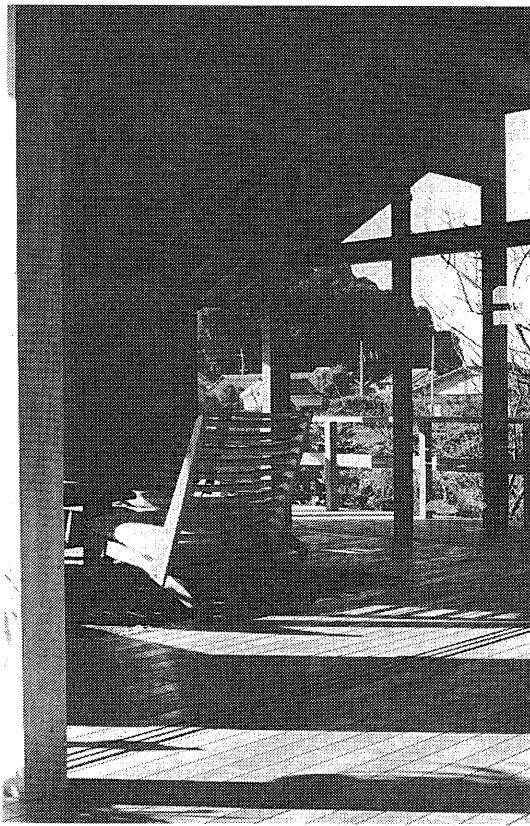
(上) タタミの間

(左) 食の間、タタミの間の広がり。屋根
の切り替わりを利用したハイサイ
ド。複合架構を際立たせる

(右) 読書の間

(下) 読書の間から見たく
つろぎの間





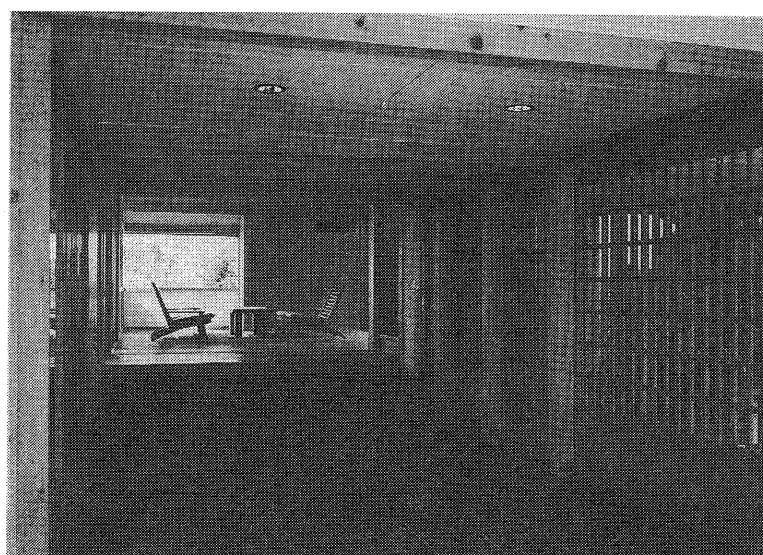
(左) くつろぎの間は巨大古墳を望むゆったりとしたデッキへとつながる

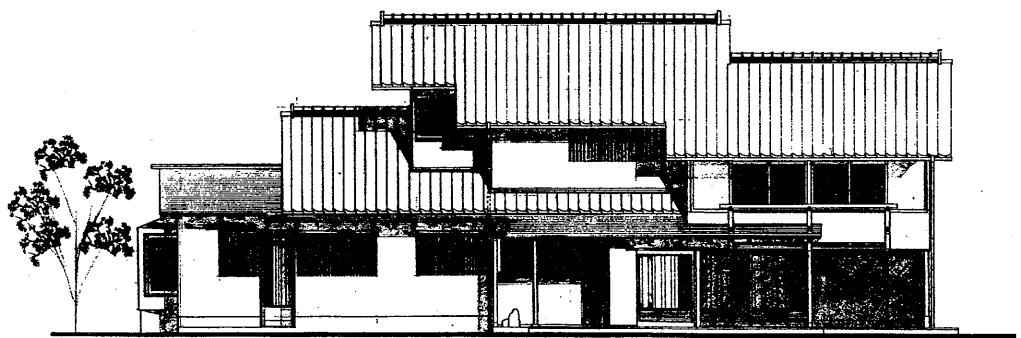
(右) くつろぎの間と自由土間（カーポート）は縁の間で結ばれる

自由土間と縁の間

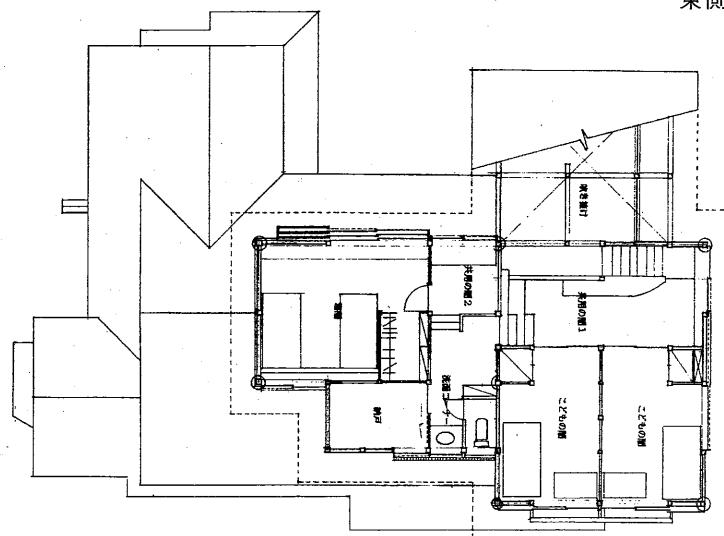
車の不在時にカーポートを有効利用。

生活空間と上手に結び、狭小敷地においてもかつての縁側コミュニケーションを復活させることへの試行。板戸とガラス戸の2重全開引戸付き。

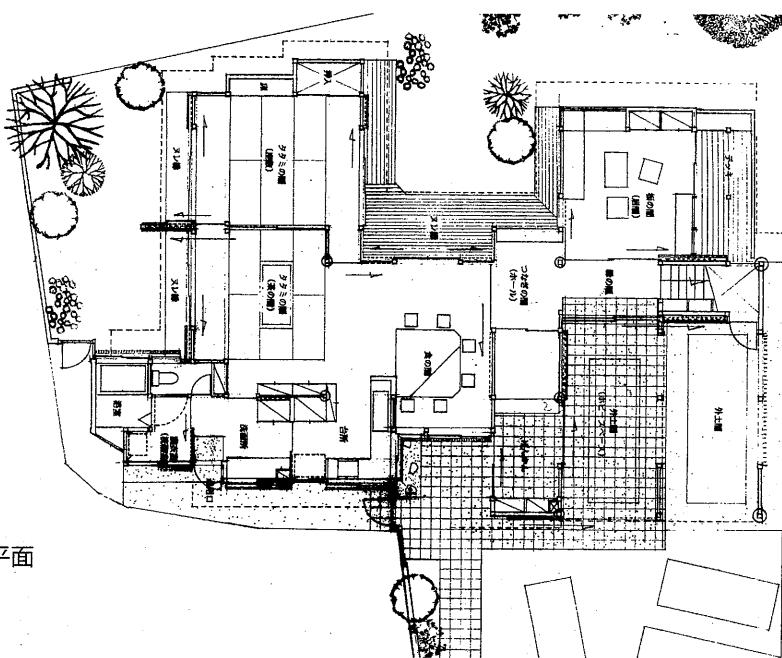




東側立面図



2階平面

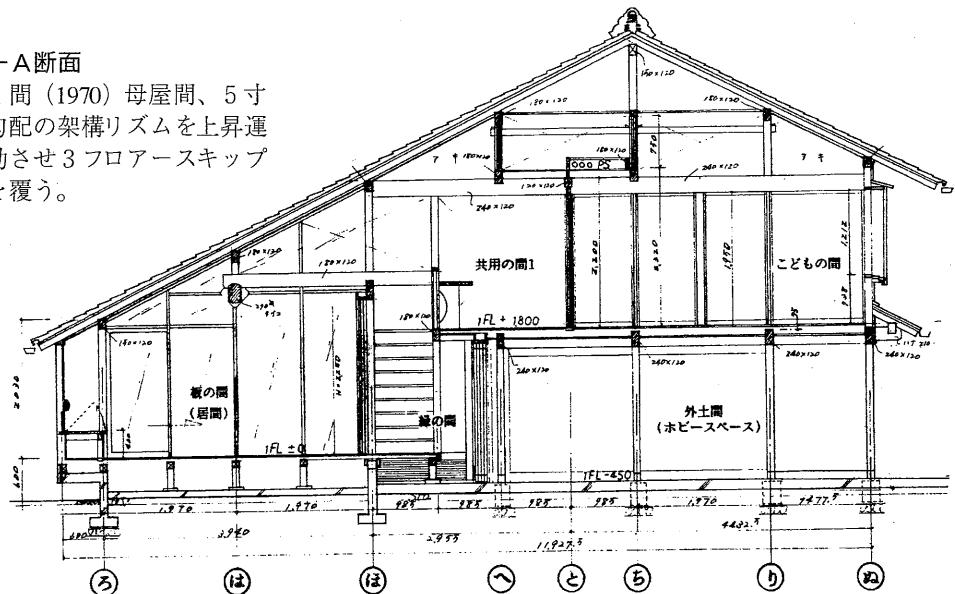


1階平面

設計に着手する際、この地の職人の仕事を5現場ほど見せて戴いた。その中で特に目を引いたのは、総て小舞土塗り壁であったこと。垂木は2寸角、ピッチは尺間。棟木は束のピッチに無関係に7寸以上の丸太。これが伝統的な奈良の仕事かどうかはともかく、現代の在来の仕事なのだろう。塗り屋の集落には5寸勾配が多く何から何まで塗り回しているが、これらの伝統建築の影響をうけてかここ桜井でも、新しい家でもぬりまわし的表現が目立つ。しかし、ある程度汎用性が望まれるモデルハウスとして塗り屋はなかろうということで、もちろん地域の言語に則りながら、とにかく「並材で組む」ということ眼目を据えた。

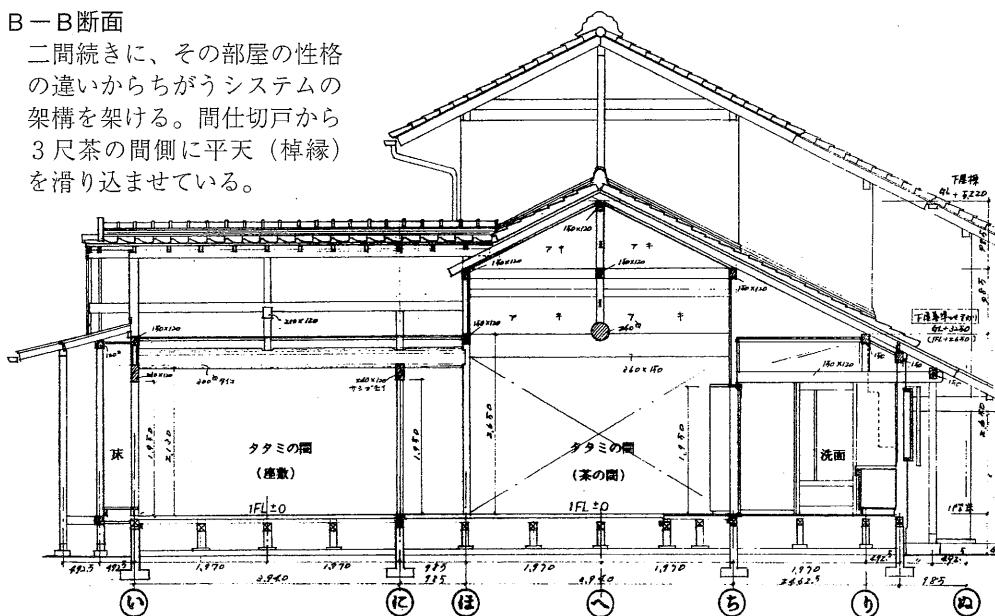
A-A断面

1間（1970）母屋間、5寸勾配の架構リズムを上昇運動させ3フロアースキップを覆う。



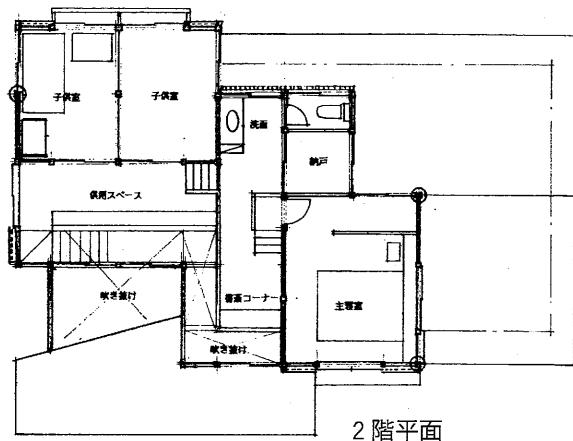
B-B断面

二間続きに、その部屋の性格の違いからちがうシステムの架構を架ける。間仕切戸から3尺茶の間側に平天（棹縁）を滑り込ませている。

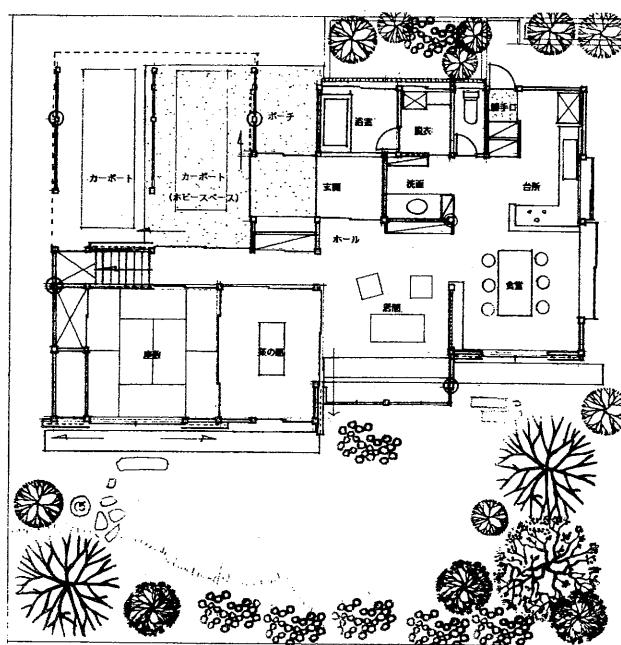




南側立面

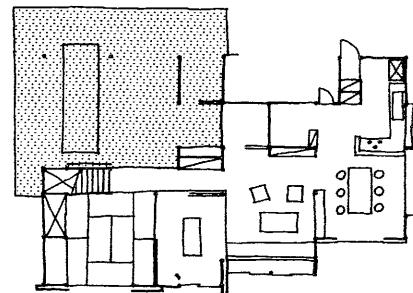


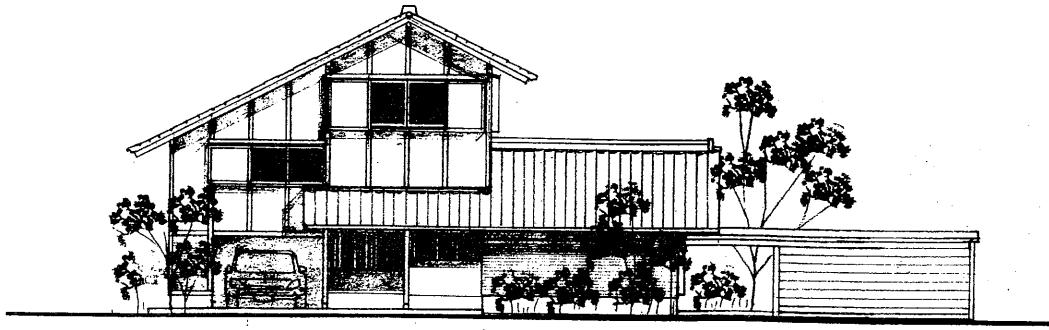
「ウッドディーハウス北道路タイプ」
山の辺の家のコンセプトを敷地、面積共少々コンパクトな場合を想定していくつかのタイプをデザイン。
これは北側道路を想定した案。空間の広がりや、ふれあいを大切にしながら、自由土間、スキップフロアで展開している。
山の辺の家に比較的に構成が近い。



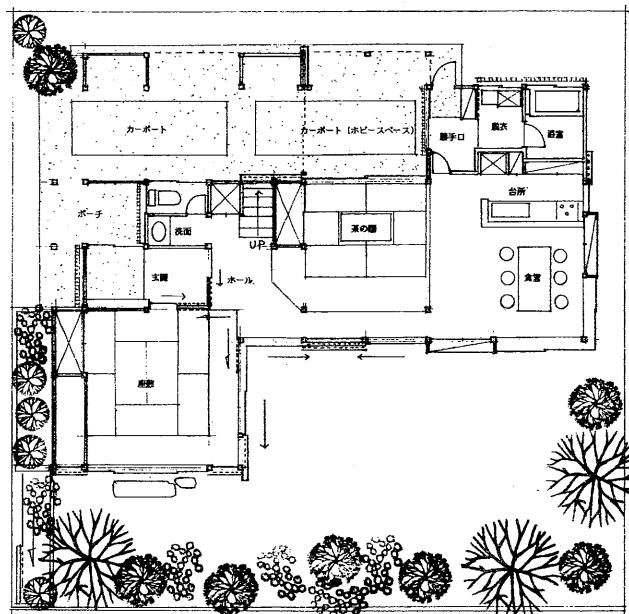
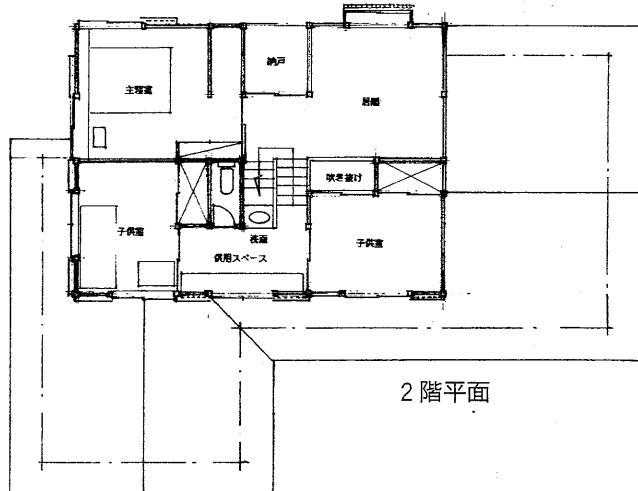
1階平面

自由土間を玄関、ポーチにからめ同時に縁の間を介してふた間続きと結んでいる。



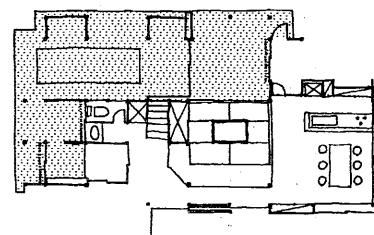


西側立面



「ウッディーハウス西側道路案」
左案同様の諸条件で西側道路の場合。玉突き2台駐車にスキップフロアをからめている。スキップ部分の独立度の高さを利用して主寝室を位置づける。一方、1階の茶の間と立体的に結ばれる板の間もこのスキップ部分に配し、本2階の子供の間と合わせてプライベートリビングスペースとしている。

自由土間をこの案では茶の間と結びインナーテラス的使用を計る

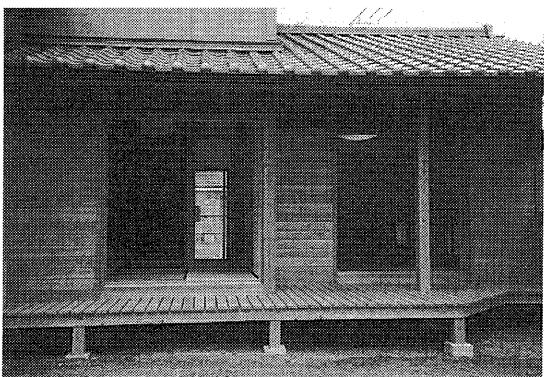




ウッディーハウス in なら

施工：奈良住協

設計：長谷川順持／住まいと町設計



ウッディーハウスの南道路タイプとして実現したもの。南庭を広く確保するために車2台玉突き駐車、1台はビルトイン、ここを自由土間とし玄関と関係づけ新しい接客空間を提案している。

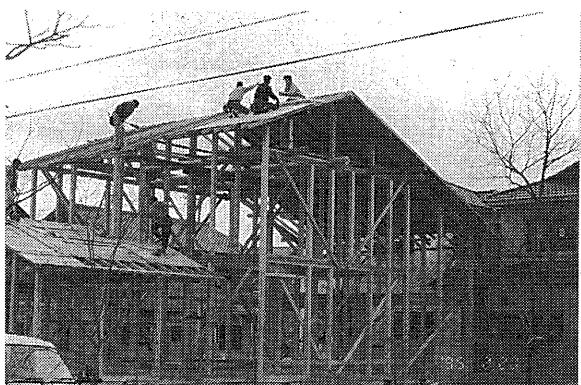
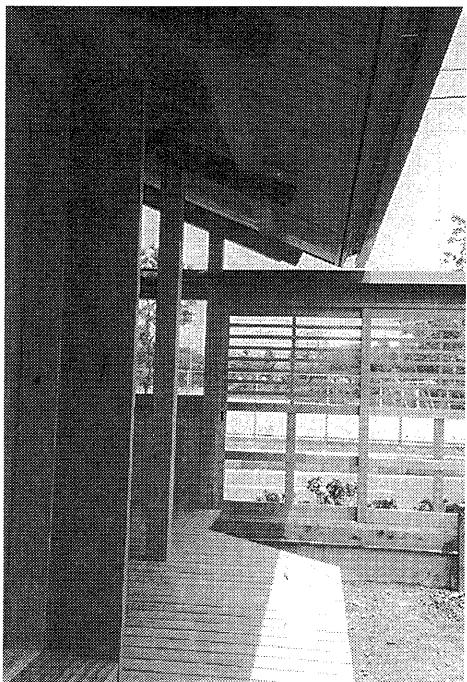
(上) 南側の姿

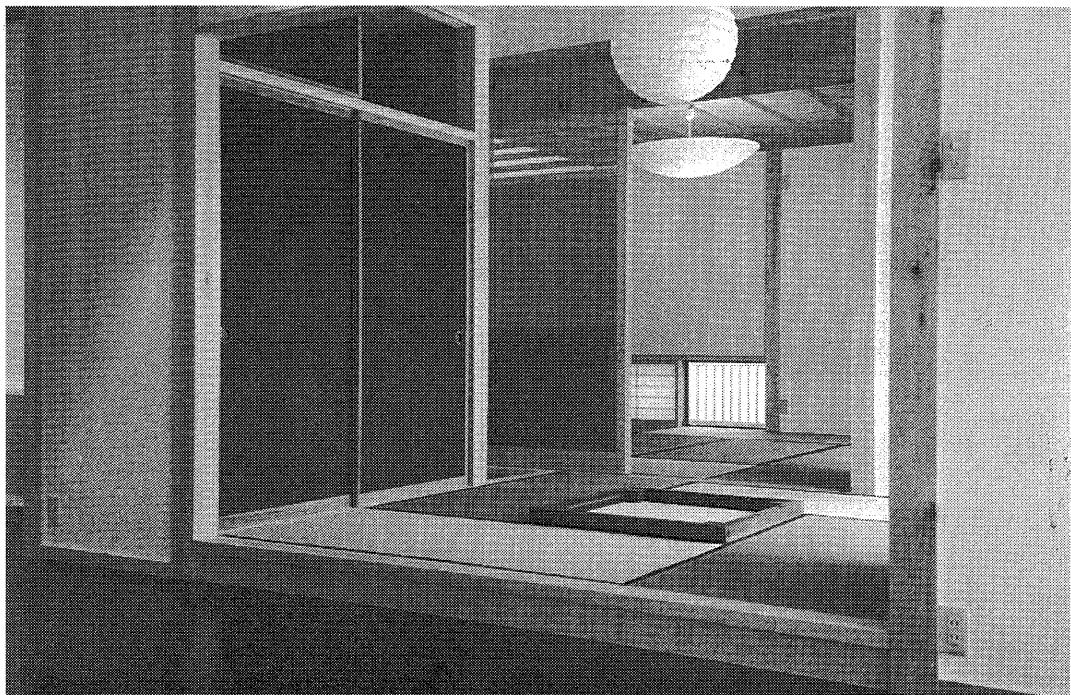
(中) 全開建具とぬれ縁

(下) 出桁の深々とした軒

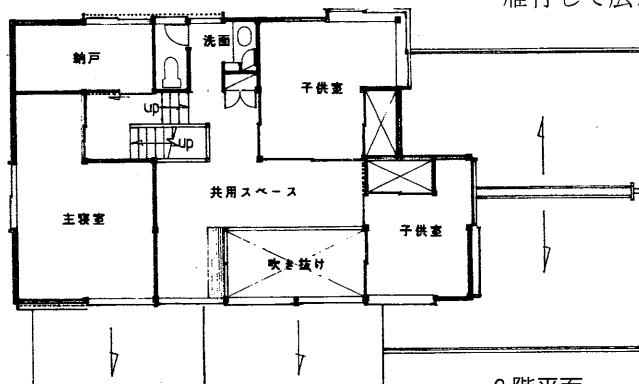
(右中) この家の棟梁小林さん(左)と私(右)。継手仕口コンクールでは常に最優秀の達人

(右下) 建前の様子。今まさに走らんとする人に注目

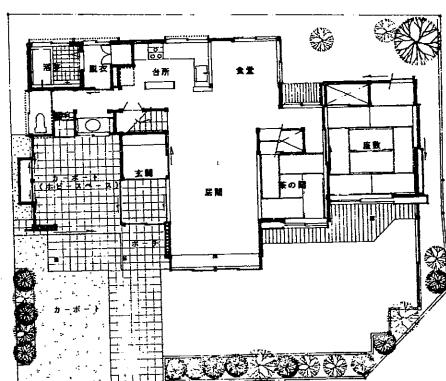




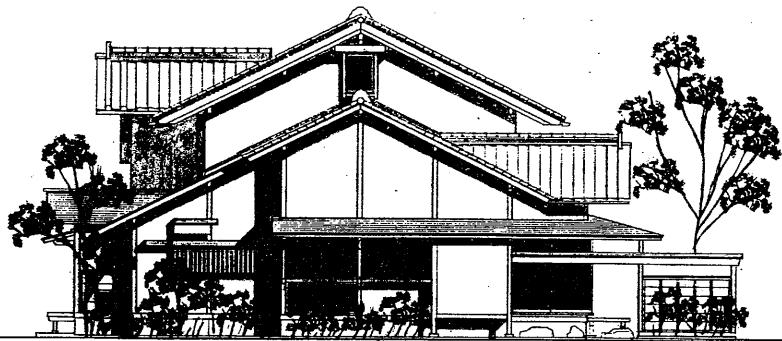
雁行して広がるタタミの間



2階平面



1階平面



町と対話する

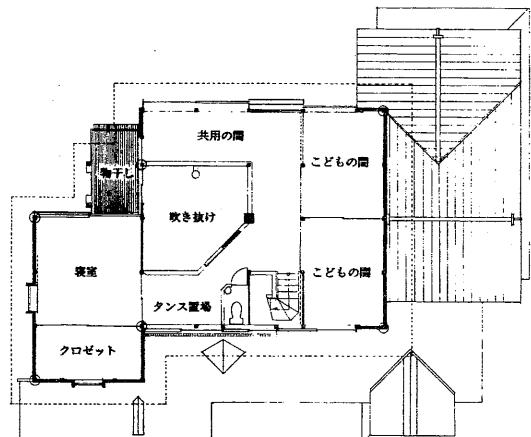


住まい

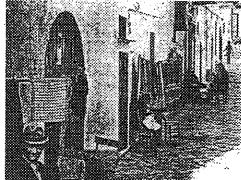
住まい

家族生活における「ふれあい」や
「だんらん」は時代を越えた命題
その基本は「対話」「対話の上に屋
根がある」そんな家づくりできな
いものだろうか

可動する扉、小さなスケールの庇で町と並ぶ
西側立面



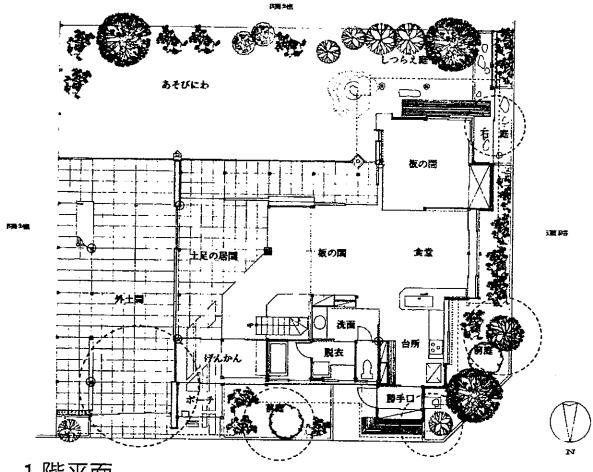
2階平面



町

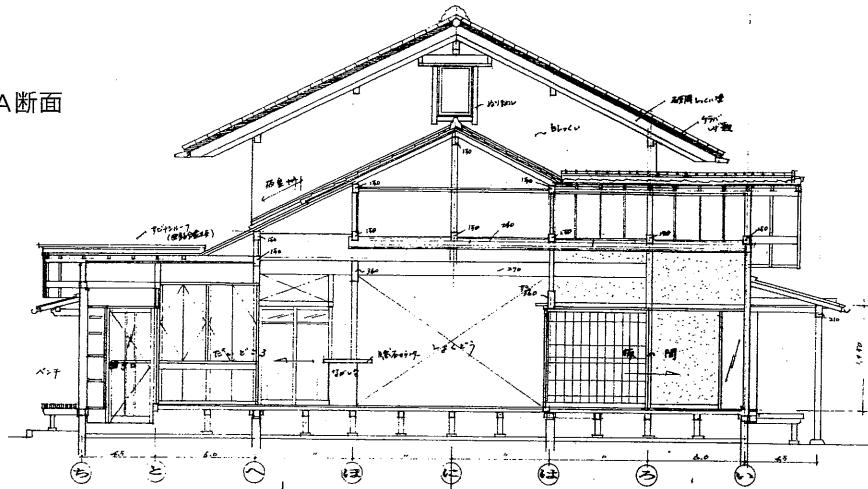
町に住み家に住む
『住まう』とは本来そういうことではな
いだろうか

日本の痩せ細った街路空間に住まいは何
ができるだろうか



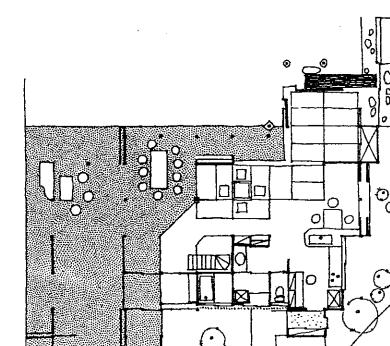
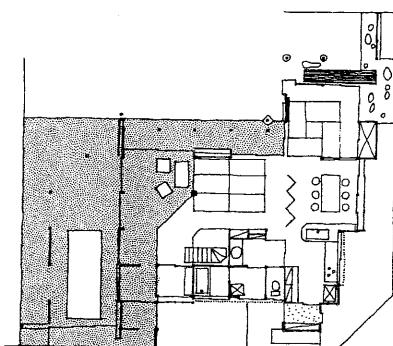
1階平面

A-A断面

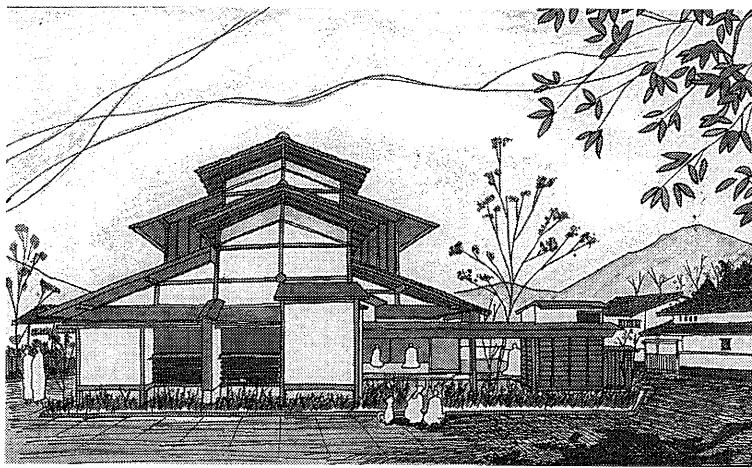


ベンチや植栽、全開するカーポートの扉など街
路に提供される空間

北側立面

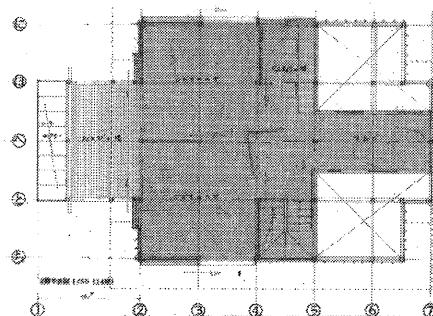


「居住新時代の木造住宅」実施設計競技は2段階審査で行われた。この案は最終選考に提出したもの。ここに掲載している図面の他に軸、伏せ図、詳細等実施設計に近い内容が求められた。メインコンセプトは「対話」。生活空間にとどまらず、住まいと町の接点もインタラクティブでありたい。その想いからささやかで手軽な手法を織り込んでみた。「可動する堀」もその一つ。[開く閉ざす] という選択の自由に立脚した装置。私見だが、プライバシーを形にするうえで [閉ざす] ことのみの追及を越えて、自由意志や創造性に働きかける在り方が常に気になっている。山の辺の家では実現できなかったが他の住まいでいくつか形を変えながら実現している。自分の家の庭は時に町の庭になり、道すがら行き交う人々と住み手とのあいだに新たな対話が生まれているようだ。

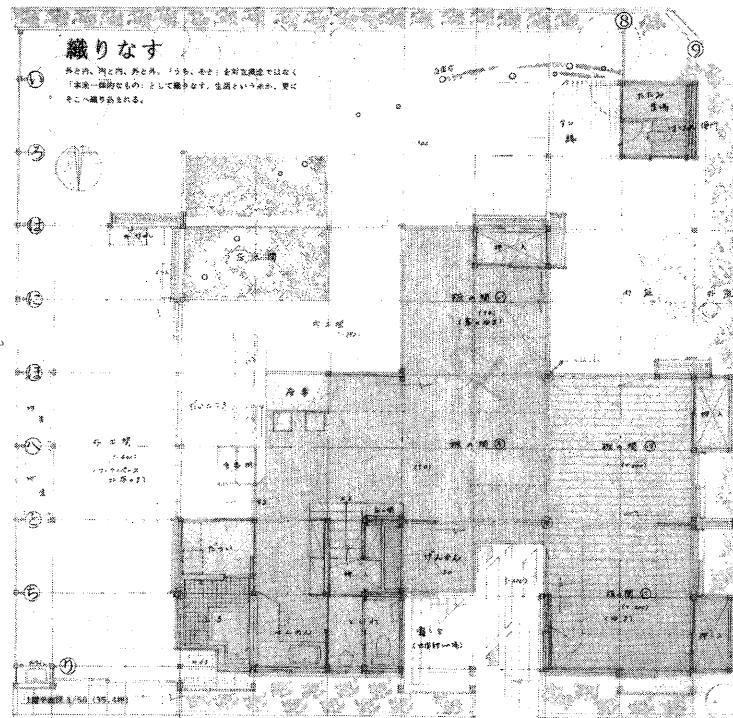


通り側の姿

2階平面



1階平面



町
と対話する
住まい

屋根伏せ配置図

対話する

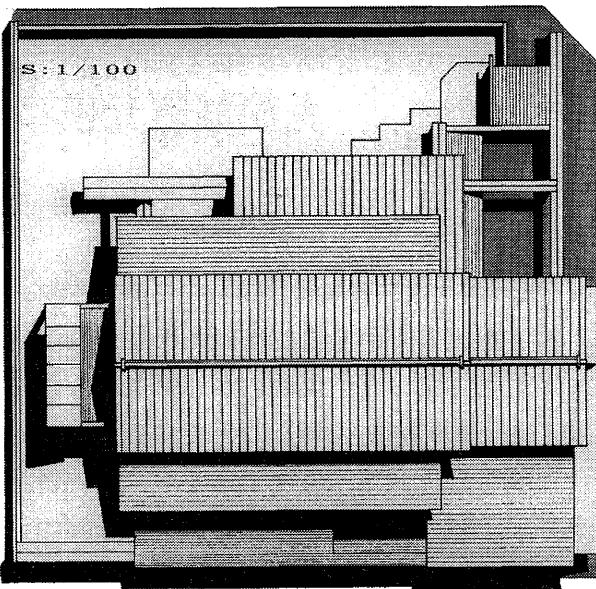
町並み景観のインフラを担うもの。今、道と敷地の境界面を問うべきとき。それは境界を「あいまい」にするなどということではなく「境界を町と住み手で共有する」と明解に考える。「うちの庭は町の庭」「町そのものがうちの庭」これを「町と住まいの対話」と呼びたい。

創意

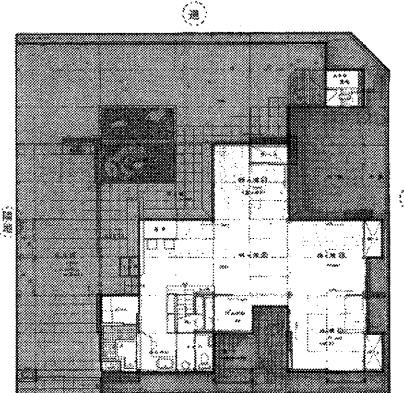
住まいの原型を再認識。合目的間取りの見直し。更に、単なる玄関ではない「げんかん」。単なる車置場ではない「外土間」。「創造的に住もう」という主体性とともに住まいはありたい。

受け入れる

「しつらえ」が生活を生きづかせる。屏風、すだれに置きダタミ。火鉢、あんどん、風鈴。自身存在感を持ち、更に領域や空気をつくりだす「和」のしつらえ。「和」とはまた「なごみ」。そんな「しつらえ」を受け入れる住まい。



第一段階提出案。伝統的軸組構法の最大の利点として開放的な空間がつくりやすい点があげられる。それは生活空間のフレキシビリティーにもつながる。この案では更に外部空間、広くは〔社会〕まで含めた外空間をプライバシーを確保しながら、どこまで住宅の内部まで滑り込ませることができるのかということに意識が向いている。個人と社会の境界を個人の側から積極的に〔開いたかたちで共有〕していくことで、町の姿も少しは善くなるのではないかとういう問い合わせである。

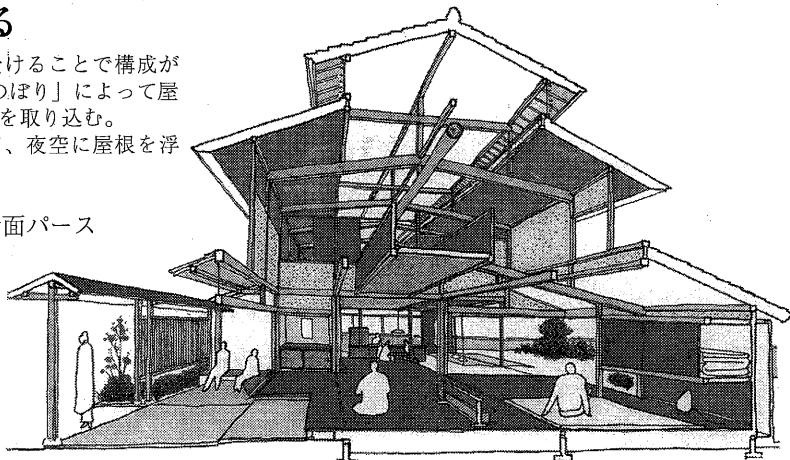


概念図 対話する境界面

浮かせる

梁組は光を受けることで構成がきわだつ。「のぼり」によって屋根を浮かせ光を取り込む。夜は反転して、夜空に屋根を浮かせる。

断面パース



丸岡城復元模型をつくる

藤 谷 智 史

福井県丸岡町から丸岡城復元模型の制作依頼を受けたのは1995年6月の終わりのことであった。丸岡町が1991年から進めている『史跡による町づくり事業』の一環であるということである。

丸岡町は丸岡城で有名であるが、その現状は天守があるだけで、堀も全て埋められ、城全体の面影は殆ど無い。今回の目的は、城郭整備にもうひとつ盛り上がりしない町に向けての仕掛けである。模型を作り、町の人々に見せることにより、「そうか昔はこうだったのか」「なんとか復元できないものか」「これは絶対復元すべきだ」というような意識を誘発させるための試みなのである。

そして吉田桂二氏の監修のもと、連合設計者市谷建築事務所がこの復元模型制作に取り組んだ。制作にあたり、様々な打ち合わせを行ったが、主なものについて以下に述べる。

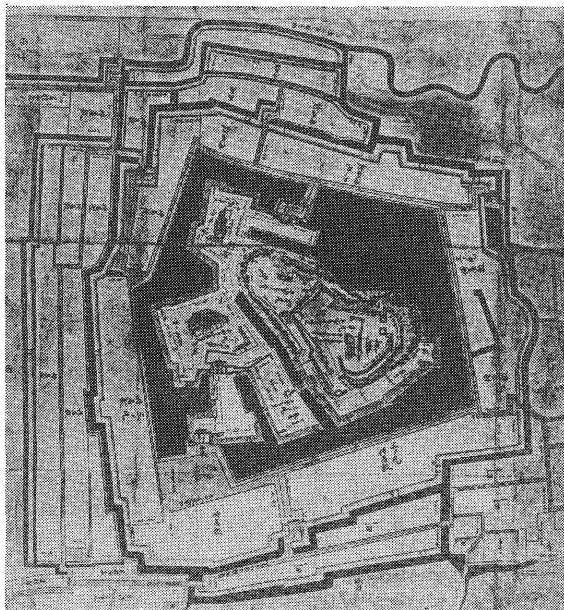
① 時代の設定

丸岡城は天正三年（1576）、柴田勝豊の築城であるが、復元をする時代の設定はここには置かず、元禄八年の有馬氏入城の頃とした。

これは、この頃の丸岡城が一番栄えていたであろうと思われるからである。

② 季 節

季節の設定においては、紅葉を出そうか、緑を出そうかで話し合った。その結果、季節は新緑の映える初夏に設定した。



越前国丸岡城之絵図。正保年間のもの

(3) 模型の縮尺とその大きさ

復元の範囲は、堀が全て入るように正方形を描き、その中の城郭と武家屋敷群の全てとした。縮尺は1/200とし、大きさは2m角とした。つまり、400m角の復元ということになる。江戸中期の丸岡の町を一望するためには、これぐらいは必要であろうと判断された。

又、今回の模型は、出来るだけ多くの町民に見せることにある。ひとつところに保管するのではなく、公民館や小学校などを巡回展示しながら公開して広めていくことが望ましい。ゆえに、模型は四分割可能とし、それぞれが木箱に収まり、輸送が容易であるようにした。

なお、展示用のディスプレイケースも一緒に設計した。

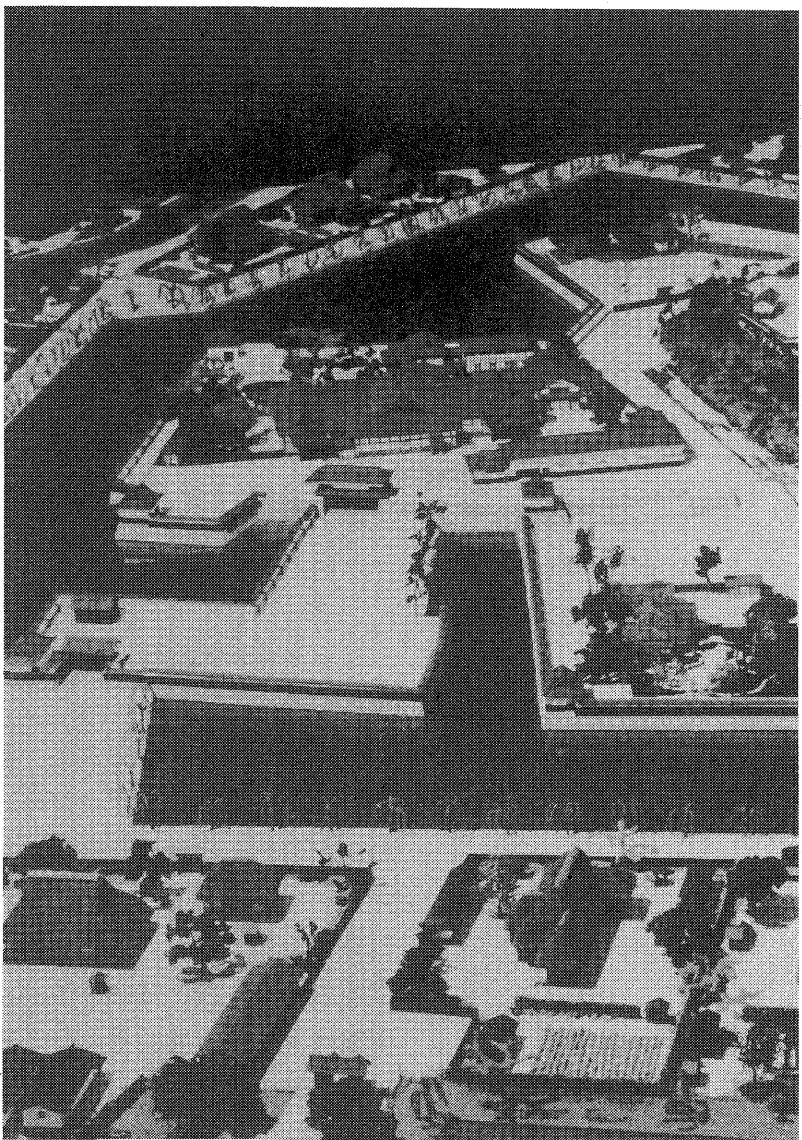
(4) 模型の素材について

模型の主な仕上げは以下のとおりである。出来るだけ簡単で効用のあがる素材をあれこれ検討した。尚、抽象表現ではなく、とことんリアリズムの表現を目指した。

- 土台：ベニヤパネルを製作。約1メートル角の土台で4枚で構成する。
- 地面：スチレンペーパー積層の上、着色仕上げ。
- 水面：アクリルパネル（ライトブルー2mm）にケントラシャを重ね、水の色をあれこれ検討した。
- 石垣：コルクシート（中目2mm）を着色。出隅コーナー部分は木質粘土を加工。
- 樹木：銅線で幹を作成。葉はカラーパウダーとスポンジで。樹種は主に松と柳、そのほかに雑木を作成。
- 壁、柱：主にスタイルフォームと硬質ボードを加工して着色。
- 瓦屋根：硬質ボードに筋引き、着色。
- 草葺き屋根：スタイルフォーム下地。木屑、コルクパウダーを接着して着色。
- こけら葺き：スチレンペーパー下地、情景スプレーにて凹凸加工、定着の後着色。

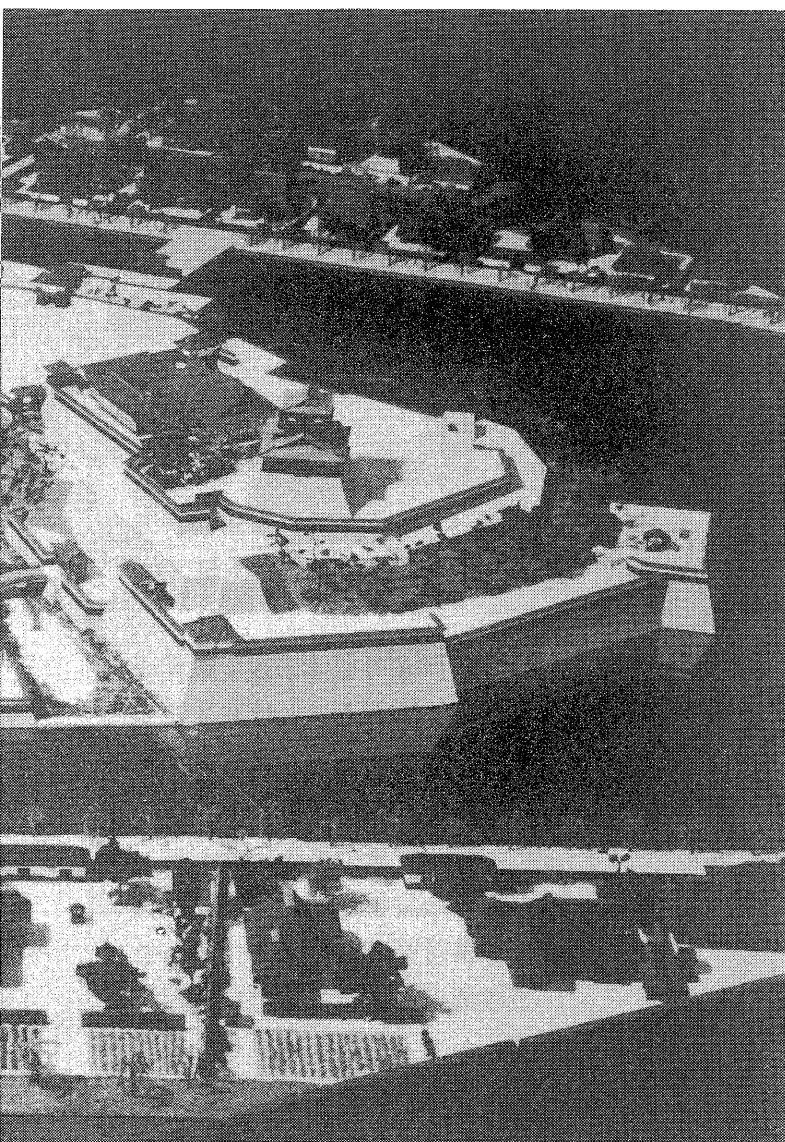
ここに挙げたのはほんの一例であるが、このようなことについての打ち合わせは最後まで行った。

丸岡城復元模型全体写真



7月の初めから作り始めた模型であったが、いざ取り組んでみるとなかなか思うように進行しない。2メートル角と大きいこともあり、なにぶん作るものが多いのだ。連合設計社の所員数人と、更に数人のアルバイトの手を借りながら、それでもなんとか進めていき、10月20日に無事完成した。

「手のかかる子供ほどかわいい」というが、私にとってはまさにこの模型が「手のかかる子供」であった。



丸岡城復元模型概要

制作期間 1995.7.1～1995.10.20

監修制作 吉田桂二

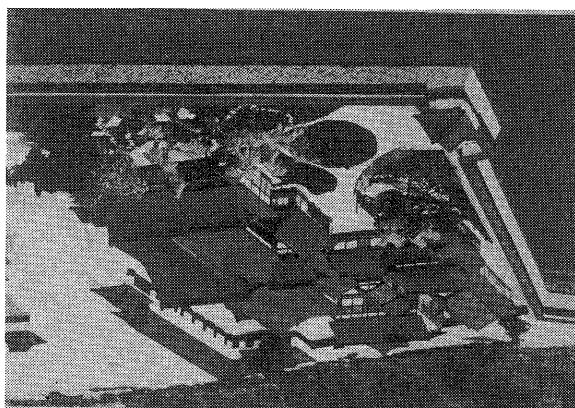
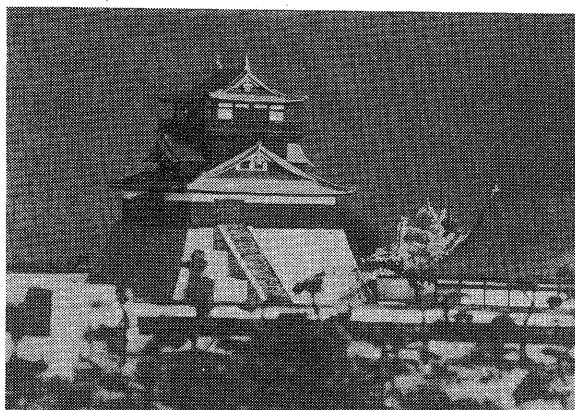
制 作 連合設計社市谷建築事務所

城内の建物

天守

創建は天正四年（1576）と言われているが、現存している天守は昭和21年福井大地震で倒壊したのを建て直したもの。

天守は現存していることもあり、立面図、断面図等の正確な資料が揃った。

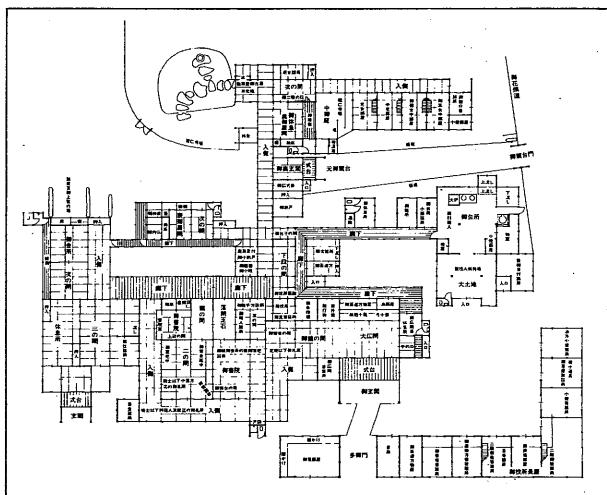


二の丸御殿

二の丸御殿においては平面図だけが残っている。これを手掛かりにしながら吉田桂二氏が復元を行った。

城郭の復元模型は御殿の復元がうまくいくかどうかが勝負であるとも言われている。この丸岡城においても、御殿は天守よりもはるかに大きく立派である。そして、この複雑な屋根形態の模型の制作は、一番苦労したところであった。

この地方の建物にしては立派過ぎないか、という指摘もあったが、古図はかなり正確なものであった。故に、確かにこのように建っていたのであろう。

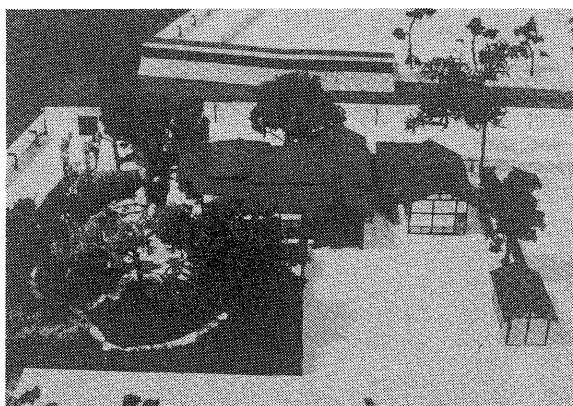
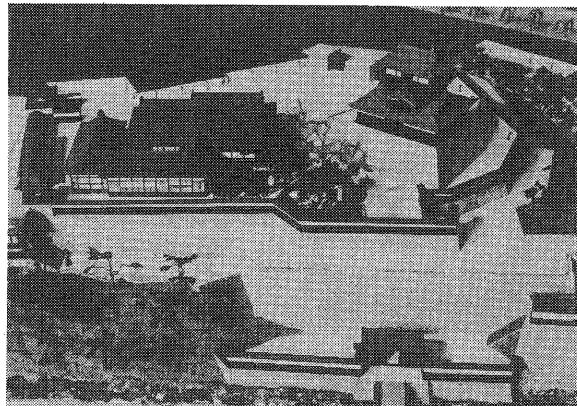


丸岡城二の丸御殿図

本丸御殿

本丸御殿の情報については、古図にある「家有り」記述だけであった。ただ、これが本丸御殿であることは間違いないと思われた。

二の丸御殿同様、模型制作に苦労した部分であった。



御隠居所

これも、本丸御殿同様に古図の「家有り」の記述が元になっている。

石橋門

石橋門の手前から天守を見上げるアングルは、この模型のベストアングルであろう。本物の丸岡城もこのように復元されたとしたら、NHKの大河ドラマは毎年ここをロケ地に選びそうである。



周辺の建物

復元した周辺の建物は、ほとんどが武家屋敷であった。この復元については、現在丸岡町に残っている「坪川家」が参考になった。これは、この地方特有の“つのやづくり”という形態をとっている。そこで基本の形態を“つのやづくり”とし、架構を想定しながらプランニングを行い、立体で検討していった。最終的に出来上がった65軒の武家屋敷は「まちなみ」を考慮しながら並べられ、便所、井戸、樹木、畠等の味付けを加えられた。

模型の完成度を上げるためにには、この「周辺環境」のグレードを上げる必要があった。「わらべうたの聞こえてきそうな模型」を目指した。



丸岡町の坪川家（絵：吉田桂二）



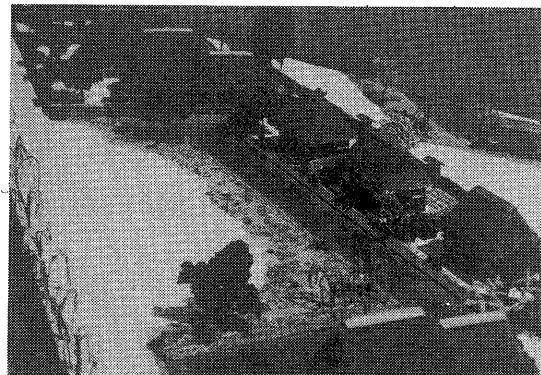
武家屋敷はまちなみを考慮して並べた



神社の向こうに天守が見える



杉林の中のお寺



水面には水草が浮かぶ

私は、模型制作は一種の“お祭り”だと考えている。複数のスタッフで作る時はなおのこと、元気を出して、楽しく、一体となって勢いで押し切ってしまうのが結局一番うまくいくように思う。まさに“お祭り”ではないか。

事務所にとっても、復元模型製作の仕事は初めてのものであった。ゆえにお、事務所内にこの“お祭り”を良いかたちで挿入したかった。制作も事務所の一角で行ったが、この“お祭り”が入ってきたことで事務所全体の雰囲気が良くなるように働きかけたつもりである。

しかし、制作にかかった四ヶ月は“お祭り”としてはいささか長かった。私にとっても四ヶ月というロングスパンの模型制作は初めての体験であったし、正直なところ四ヶ月目にさしかかるころには、さすがに煮詰まってきてスタッフ同士キレそうにもなっていた。そこで、これはいけない、と話し合ったことは「悲壯感を出さないでやろう」ということだった。悲壯感は模型の精度を落とすであろうし、苦しくなるのは良くないことである。最後まで“お祭り”を持続させるためには努力も必要であった。

とにかく1995年10月28日、完成した模型が丸岡町に無事納品された。そして、その翌日から丸岡町文化祭で一般に公開された。テレビ、新聞等でこれが紹介されたこともあり、文化祭も盛況で、模型はたくさんの町の人達の目にふれた。そして、その反応もどうやらあったようである。「このあたり、おまえの家だろう」「そうか、こんなだったのか」「裏門あたりは実際に復元できるのではないかなあ」という声が丸岡町民から実際出てきたようである。“町に向けての仕掛け”という当初の試みが、動き出したと考えてよいであろう。なおこの模型、現在は丸岡町役場のロビーに展示されているようである。

余談ではあるが、スタッフのA氏がラストに作った二人の忍者が丸岡の人達に非常に気に入られた。子供達が“城内の忍者探し”をしているということだ。これは、スタッフの“遊び心”であったのだが、最終的にはこれが一番受けた。

私自身「ものを作る上で“遊び心”が人の心をつかむ」ことを再認識したエピソードである。



模型制作の様子、手前が吉田桂二氏

建築 時評

かわらミュージアム

滋賀県近江八幡市

設計・出江 寛／出江建築事務所 施工・秋本組

近江八幡は近江商人発祥の町として知られている。町の当初は豊臣秀次の城下町として始まったが、秀次の失脚によって僅か10年で城下町時代は終わり、江戸時代を通じて町人町であり続けたことで、全国的シェアを持つ大商人の町となった。山裾に伸びる八幡堀は城山を巡る濠の遺構で、そこを起点に整然と並ぶ3本の重要伝統的建造物群保存地区に指定された通りは、この町の最も歴史的な部分。八幡堀は商品を運ぶ運河となって琵琶湖と結び、堀に沿って土蔵が立ち並んでいる。

「かわらミュージアム」は、この八幡堀が直角に向きを変える部分の凸角を用地にしている。このあたりは「八幡瓦」として知られた名窯業地だったのだが、今では全く廃絶し、この用地には潰れかかった数棟の建物が草の中に残るという、荒廃した状態になっていた。

近江八幡市では、町を整備してゆく上でここを重要地点と位置付け、荒廃した状態で放置しておくのは大きなマイナスと判断し、確かに昨年のことだったと思うのだが、「かわらミュージアム」の公開プロポーザルコンペを実施した。この建物はコンペの最優秀案が実現したものである。

瓦を素材として造形化するのをテーマとすれば、目下のところ密度の濃さから見て、出江寛をもって第一者としてさしつかえないであろう。このコンペには彼は勇躍して臨んだはずだ。「このコンペ、俺が取らずに誰が取る」という気分だったに違いない。応募案には、彼がこれまで手掛けてきたデザイン化された瓦のバリエーションが、ふんだんに散りばめられていた。彼が最優秀の評価を得て、この建物として実現したことは、近年のコンペが、ともすれば大雑把な形の遊戯に終わっている現状から見て、快事といってよいであろう。彼はディテールを、というよりは、目に近い部分を念入りにつくるタイプの建築家だから、この建物の隅々には瓦のデザインがさまざまに凝らされ、楽しさが味わえる建物になっている。

全体の構成が分棟の複合形になっているのは、この敷地条件なら誰もがそう

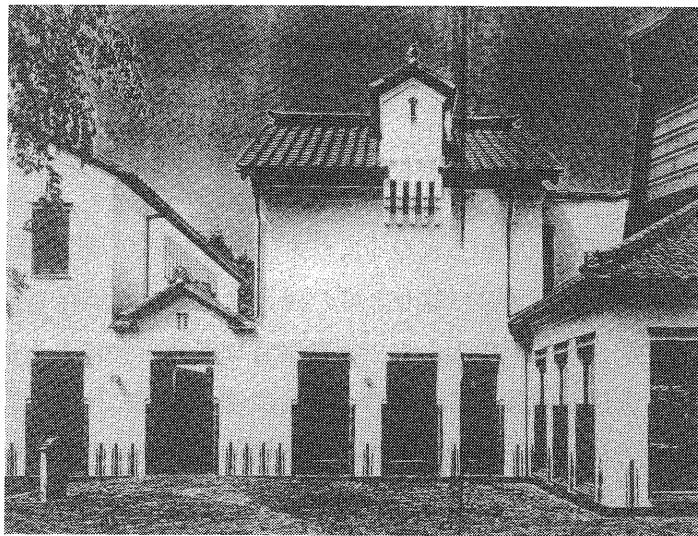
するだろう。取り立てて言うべきことでもないが、建物の間にできる路地空間に楽しさのあるのがよい。ここにも目に近い部分が大切に造形されている。

しかしゆっくり眺めていると、どうも凝り過ぎではないか、という気分がてくる。この程度の規模の建物では、妻の数が多すぎると思う。多分半分でよい。それに造形要素も多すぎる。もっと静かな建物の方がよい。要するに饒舌であり過ぎるのではないか。「俺の出番だぞ」という気負いがそうさせたのかもしぬ。

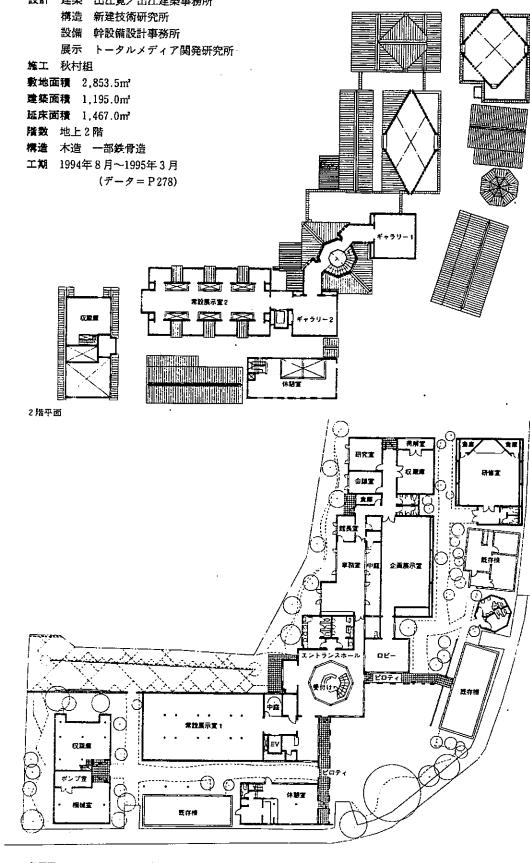
さまざまある造形要素のバランスにも問題がある。特に階段上部の八角の塔はいただけない。不細工で大きすぎる。菱形になった屋根も企画展示室だけにした方がよかった。研修室棟は運河に沿ったところにあるのだから、もっと素直に切妻にすべきであろう。

もう一つ不満を言わせてもらうなら、既存の蔵を3棟残しているのはよいけれど、何も使ってないのはどうしたことか。ただの空き家にしておくというのでは、残し方としてよいとはいえない。何かしらの用途を考慮するのが常識だ。

文責・吉田桂二



設計 建築 出江寛／出江建築事務所
構造 新建技術研究所
設備 幹設備設計事務所
展示 トーキュームディア開発研究所
施工 秋村組
敷地面積 2,853.5m²
建築面積 1,195.0m²
延床面積 1,467.0m²
階数 地上2階
構造 木造 一部鉄骨造
工期 1994年8月～1995年3月
(データ=P278)



『日本の民家』 今 和次郎・著

益子 昇

岩波文庫に収められた『日本の民家』の解説（藤森照信）に、今和次郎（1888～1973）が本書に取り上げた民家はほとんど実存せず、それは文化財指定を受けるような民家を対象としない著者固有な研究姿勢によるというように評している。

もとより戦後日本における社会環境の激変に伴って、今日では地域的特色を伝える各地の民家の絶対数そのものが圧倒的に消失した。それらの事情が相俟って本書がかつての生活文化を著した古典として岩波文庫のライブラリイに加えられたのだろう。

『日本の民家』の初版は1922（大正11年）に刊行され、長く版を重ねてその独特な民衆芸術への視線とスケッチとによって多くの読者を魅了した。

作家・堀辰雄や詩人・田中冬二の蔵書中にも今和次郎の書物名が確認できる。最近では、ちくま文学アンソロジイの『絵のある世界』文中にバラック建築のスケッチが紹介されている。

今和次郎さんというと私には学生時代に強烈な想い出がひとつだけある。

先生が亡くなられる前年の秋に駒場東大で催された数名の建築家によるゼミナールに参加し、最後に登壇された時の今和次郎の有名なジャンパーにズック履きといういでたちに場内がざわめいた。そして、考古学に対抗して現代の風俗を体系化しようとして孝現学を創始した話や柳田国男に破門されたエピソード（これは今が勝手にそう解釈していて、柳田のほうにはそのような意識はなかったというのが真相のようだ）やらを、自ら「愉快だねえ」を連発しながら實に元気に楽しそうに話された。

この時、私は相模書房版の『日本の民家』をバッグの中に持参していて、講演終了後の先生に近寄り、思い切ってその本への署名を願い出た。

「今日のお話にはとても感動しました。民家についてこれから僕も一生けんめい勉強しますから記念にサインして下さい」

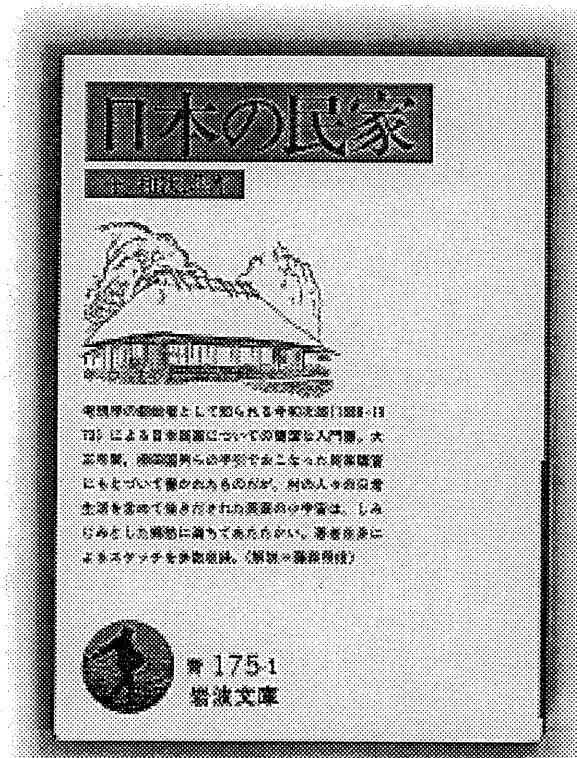
立ち止まった先生は、私の書き込みやアンダーラインがたくさん引かれた御自身の著作をなつかしそうにパラパラと頁を操られ、

「ああ よく読んでいただきましたねえ」

と言って表紙の見返し部分に“今和次郎”と書いてくださった。本当にうれしかった。

今をときめく路上觀察学会の建築探偵でもある藤森さんは『考現学入門』ちくま文庫解題に、自分たちは父親の顔を見ずに育った“ままっこ”であると記されているが、以上のようなわけでかろうじて私はたった一度だけすれちがいましたよ。(エヘヘ)

今和次郎の全仕事に接するには『今和次郎集』(全9巻・ドメス出版)や『今和次郎・民家見聞野帖』(柏書房)、『モデルノロヂオ(考現学)』復刻版などがある。





本当の生活文化とは

おかべ ともこ

「飯能のいい大工知らないか？」吉田先生に突然尋ねられた。先生の妹さんが私の住んでいる飯能市内の南川という所に土地を買われたが、いい施工者がいないという。

「いい人いますよ。」私は即答した。高橋さんが頭に浮かんだからだ。この人は高橋木造建築研究所という、たいそうな名前を付けているだけであり、住まいというものにしても、流行や施主の要求だけを作るのではなく、伝統、文化などもしっかり考えた仕事をしている人だと常々思っていたので、自信をもって紹介できた。

充分な予算だったとはいえたかったかも知れないが、設計した方、住む方にとってもこれ以上のものはなかったのではないかと思える仕事をしてくれた。

施主である猿田さん御一家とのお付き合いも始まった。素朴な人間味のあるご家族だ。特に奥様は心が洗われるようなお人柄、一度お会いしてみる価値はある。

それよりなによりこの一家、焼物を仕事としているという、素材を扱っている材木屋としてはとても興味がもてた。

地球で人間が利用してきた三大素材というのは、木、石、土だと思うが、これは地球が始まって以来のものだと思うし、この先も決して無くなるはずのないものだ。その二つにかかわっているもの同志だ。この3つは人類が出現して生活をしてきた時に、住まいそして道具にしてきた生活文化の原点であったはず。

木だけを見ても、日本においては木の文化といわれているぐらい木に依存した生活をしてきた。木を切った時に幹はもちろんだが、葉、枝、皮をそれぞれ人々は利用してきた。不要になった時は燃料として使ってきた。ほっておけば、自然に腐り、次の代への肥料となつた。これは自然の輪廻だ。

土においても岩は石にして土となっていくが、その土をこね何かを作ったとしても、不要になった時、土に埋められ長い時間堆積することにより石へと戻っていく。こちらもしっかり輪廻が行なわれている。これが地球にとって大事なことなのだ。

人が地球に住まわせもらっている以上、その素材に手を染めている私たちは、仕事に誇りをもち、またそれを利用しようという人たちと、使った後は元に戻せるようにと考えるのが理想ではないのか。

人が生活していくのに必要なものは衣食住だと言われているが、食においてはグルメが騒がれている中、添加物、農薬等の指摘がされているが、まだ一部でしかない。食べ物はカビがはえたり腐ったりするから保存法を考え料理法を考えてきた。おいしく食べるのが基本だから、交通の不便な頃は同じ魚でも海辺の食べ方、山奥での食べ方があった。

冷蔵庫に数ヶ月間忘れられた薄味のノリのビン詰が、健全なまま発見された時の事を考えてほしい。カビがはえ、腐っていれば、物を粗末にした自分を反省するところだが、それどころではない、まだ元気なままのノリに恐ろしさを感じる。

住宅にしても同じこと、木はキズが付かないほうが良い、ソラないほうが良いと、ボンドをたっぷり使った合板のフローリングにバッヂ表面を塗料でコーティングしたり、腐

らないほうが良いと防腐剤をたっぷり注入したものばかりを使った家に住む恐しさ。風通し悪く作った床下の土台であっても腐朽菌は寄って来れないだろうが……。そして、硬さのためによる足の疲れや有機化合物等の発生による、アレルギー障害などが待っているだろう。

こんな家を人々は望んでいるのだろうか。

これでは人の住めない状態なのではないだろうか。こんな家ばかりになると、家が、木が腐る前に、全人類がお先に失礼して土に戻っていくことになるかも知れない。

住む人の生活、健康は考えず、単価を基本に考え合理性、見た目ばかりのもの作りでは、実用性を欠き、人間に害を与える恐怖の館となってしまう。住まいは便利さも必要だが安心して住めること。そして家にいるだけで楽しくなるものでなくてはと思う。

猿田一家の作るものは気持ちを楽しくしてくれる。アートのわからない私には、有名な作家の不可解な作品よりも、部屋に一つ置いておくことにより、心を和やかにも豊かにもしてくれる置物や器のほうがうれしい。

それでいて実用性はきちんともっている。

魚を乗せると映える皿でも、その煮汁がこぼれるようでは駄目なわけで、すべては使う人にとってしっかりと目的を達成し、見た目にも満足感を与え、不要となった時には必ず土に戻れるということ。

文明は、自然を破壊しても便利で自分たちの都合の良いものを求めていると思うが、自然と共生して生活をしていくということを大原則にした生活文化を考えていきたい。

この同じ市民となった一家の出会いに、この先、共に考えを交し合い、話し合うことによって、一緒に何かをやっていけるのではないかという可能性に私は期待している。



■ 生活文化同人会則

●生活文化同人の目的

1. われわれは、自らの建築（オリジナリティ）へと向かうアプローチ（方法論）について互いに研鑽し合う。
2. われわれは、生活文化という視点で各分野の伝統技法に学び、未来のモノづくりに活用する。
3. われわれは、旅を通して固有な地域環境に学び、新たな創作活動への契機とする。

●会員の種類

生活文化同人（以下同人）の会員は以下による。

1. 年会費
2. 会報購読会員
3. 定例会聴講会員

●総会

年会員によって構成され、年1回以上開催することとする。世話人会においての年間の活動報告等を行うものとする。

●世話人会

世話人会は世話人によって構成され、本会運営に当たっての各種活動方針の決定機関とする。

●世話人

同人年会員の中から、積極的に提案、および行動することを原則として自薦、他薦によって自由に本会の運営に参加し、責任を持ち事務局に協力する。その任期は1月から12月の1年間とする。

●事務局

事務局は以下の構成による。各担当は世話人会で決定する。

- ・事務局
- ・会計
- ・機関誌編集局
- ・会報編集局

●同人の活動

- ・大平建築宿の開催（1回／年）

- ・定例会の開催（5回／年）
- ・機関誌の発行（1回／年）
- ・会報（生活文化）の発行（隔月）
- ・他ネットワークとの交流
- ・その他

●入会の手続きと会員の特典（平成8年）

1. 年 会 員 7,000円：定例会聴講、機関誌・会報の購読
2. 会報購読会員 2,000円：会報の購読
3. 定例会聴講会員 聽講費：2,000円／回（学生割引 1,000円／回）

○年会員・会報購読会員は1月から12月までの年単位とし、中途入会の場合
も上記とする。

○年会員は1家族ひとりで可とする。ただし、定例会聴講の場合は年会員で
ない家族は聴講費（学生割引と同等）を払うものとする。

○会費納入先 郵便局 総合口座10010-54101181

生活文化同人代表 吉田 桂二





1996年は敬愛するW・モリスの没後100年にあたり、私の工房も開設して10年間を経過することができた。工房発行の小冊子にてこの間の仕事を整理して……とも思ってみたが、私などまだ後ろを振り返る年令ではないので、たかが十年、されど十年と開き直り、当分の間はこのままの姿勢で歩き続けようと決意を新たにした次第だ。

そんな折り、『日経アーキテクチュア』誌がここ数年に私が関わった仕事について取り上げようと、那須野の地まで取材のために数回往復してくれた。どんな内容になるのか未見だが、これを持って私自身の10年の区切りとしたい。

閑話休題。そのような私事にわたるざれごとよりも、本日、ここに我らが生活文化同人の機関誌創刊号を発行できることを、歓びと共に誇りに思う。フェローシップ！（同志的連帯）これこそがモリスの精神である。

〈編集子〉

— 生活文化 創刊号 —

1996年4月発行

編集・発行	生活文化同人
発行所	同人機関誌編集局 (アカンサス建築工房内)
	〒324 栃木県大田原市新富町2-3-34
	TEL 0287-22-2288
	FAX 0287-22-7977
印刷所	有限会社イリサワ商事印刷部 〒320 宇都宮市中央3-5-15